



Title	モンゴル 人と教育改革（1）：社会主義から市場経済への移行期の証言
Author(s)	小出, 達夫; KOIDE, Tatsuo
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 98, 263-302
Issue Date	2006-06-30
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.98.263">https://doi.org/10.14943/b.edu.98.263</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/14441">https://hdl.handle.net/2115/14441</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	98_263-302.pdf



# モンゴル 人と教育改革(1)

— 社会主義から市場経済への移行期の証言 —

小 出 達 夫\*

## Educational Reform after 1990 in Mongolia

Tatsuo KOIDE

【要旨】1990年モンゴル人民共和国はそれまでの社会主義体制と決別し、市場経済社会に移行した。当時ソヴィエト・ロシアや東欧諸国をはじめ、多くの国が社会主義から自由主義経済へと移行したが、移行の形態は国により異なる。東ドイツのように明確な断絶を示したところもあるが、ソヴィエト・ロシアのように支配政党が変っても社会主義時代の中核にいた人間の一部がなおも社会の諸機関に残ったところもある。モンゴルはこうした移行形態とは異なり、旧体制を支えた機関がほとんど無傷のまま新体制に継受された。人民革命党の旧幹部が若い世代に入れ替わっただけで、人民革命党はその後も政権を担い、基本的には現在に至っている。なぜこうした移行が可能だったのか、それを教育セクターで検証してみたいというのが小論を意図した課題意識である。

ここでは1990年当時教育セクターの中核にいた人の証言を通してこの移行期の実態と特徴を析出してみたい。教育行政を専門とする筆者にとって制度史的なアプローチによりこの移行期を説明することは大事な課題であるが、それよりもこの時代を生きた歴史の証人から生の声を聞いてみたい。おそらくこのようなアプローチから教育行政学の有力な仮説が見出されるのではないかと考える。

【キーワード】モンゴル、教育改革、社会主義から市場経済へ、1990年後の移行期、ヒアリング調査

### まえがき

2002年3月、私は北大を退職した。それまでの所属は教育学部教育行政学講座だった。退職後は教育行政に関連したボランティア活動でもしようかと考えていた。確たる成案があったのではない。同じ年の11月、文部省からモンゴルへ行ってくれないか、という問い合わせがあった。文部省から派遣する人がいないのであれば引き受けてもいいと答えた。結局モンゴルへ行くことになったのだが、身分はJICA長期専門家、職務はモンゴル国教育文化科学省副大臣つき教育行政アドバイザーだった。

2003年3月から4月にかけて短期専門家として、私の前任者である北尾善信さん（文部省研究振興局・研究調査官）との引継ぎをするべくモンゴルに渡り、2週間ほどモンゴルを見て回

\* 北海道大学大学院教育学研究科名誉教授（教育行政学）

り帰国し、5月に再度モンゴルへ行き仕事を始めた。

モンゴルでのアドバイザーとしての仕事については別の機会にまとめるとして、今回は教育行政学を専攻するものとして、教育行政に関連するテーマについて報告したい。私はかつて資本主義から社会主義への移行期について関心を持ち、第2次大戦後の東ドイツ教育改革をテーマにしたことがある。今回はそれとは逆に、社会主義をやめ資本主義（市場経済社会）に逆戻りするケースについて検討することになる。とはいえモンゴルについてまったく無知であった私にとって、この国を対象にこうしたテーマで教育行政の変化を追うところまで関心は煮詰まっていなかった。だから、とりあえず90年前後から教育行政や学校管理にかかわった人たちの生の声を収録し、そこからテーマを析出する、という手法をとることにした。モンゴル人の目で見えた移行期の証言記録である。

ヒアリング対象予定者は30人をくだらない。JICA任期中これら全部にあたる暇はなかった。だいたい行政アドバイザーとして過ごしたこの2年間、教育行政の特定テーマからモンゴルを見る悠長な時間はなかった。教育改革の実践的テーマに追われ、そのテーマを実現する条件づくりに追われ、モンゴルの教育現場から出てくる応用問題の解決に追われ、私の個人的テーマに関して調査する余裕は皆無だった。任期末の2005年4月になり、どうやらじたばたしても残された時間で以上の課題をこなすことは無理だとわかった。だから少し遊んでやれという心境になり、教育改革の要職にいた人々のヒアリングを始めた。これはその記録である。はじめたばかりの仕事である。とはいえこんごモンゴルに来る教育関係者にとって大いに参考になるはずのものである。

ヒアリング対象に選んだ人は、90年以前に教育行政の要職にいた人、90年以降の教育行政関係者、改革の方向に影響を与えた人、各種の学校教育の改革を推進した中心人物（10年制学校、職業教育、大学教育など）などである。なにせヒアリングを開始したのは帰国直前の4月であり、4月中に5人、8月と10月に再訪問した際に7人に会うことができた。内訳は、教育行政関係者6人、大学教員5人、現場教師1人である。今回は、これら12人の「歴史の証言」をまとめ、記録として残した。12人の方たちに厚くお礼を申し上げたい。歴史の証言から何を総括できるかについてはこの記録全体の最後に触れることにする。

## I 教育行政関係者の証言

### 1 B・エルデネスレン（Baatar, ERDENESUREN 国会議員）

略歴 オブス県出身。会計学・マネジメント論を専門とする（ロシアの大学で学位を取得）。

90年以降についていえば、91年にモンゴルビジネスカレッジを設置し学長になり、ついで国立の行政アカデミーの学長をし、2000年に教育省副大臣に就任した。2004年6月の総選挙でオブス県から人民革命党候補者として立候補し当選した。現在は国会の社会開発常置委員会の委員長で、教育関係や地域開発の分野で活動している。4月26日に国会議事堂の会見室でヒアリングした。

（1990年以降のモンゴルの教育についてどのようにお考えですか）

90年までの教育はそれほど悪くはなかったし、レベルは高かった。物的にもよかった。特にソムやバグの物的条件はよかった。ただ社会主義意識の悪い面が出ていた。

90年以降、ソムやバグの物的条件が減ってしまった。教育内容については有用性から離れて

いる。教えればいいというだけで、指導法の改善や教員再訓練が遅れている。教員研修に必要な経費をつけても旅費にまわってしまい、内容の向上や教員の能力向上につながらなかった。

(2000年の政権交代の直前にADBの援助で作られた教育長期計画(2000-2005年)についてどのようにお考えですか)

正直に言えばそれほどいいものではなかった。実施できない内容が多かった。数字が多く書いてあったが、現実性はなかった。いろいろなニーズは書いてあるが、その実現の仕方は書いてなかった。いま2005-2010年の長期計画を作成中だ。

(教育省の政策の変遷を知る政策文書や資料を見る場所がない。政策文書館を作る計画もあったと聞かれますか)

政策資料室は行政管理局が担当しているが、教育省の部屋が手狭で設置できなかった。基本資料で言えば、年度別の教育省報告書、大臣委員会議事録、セクター別報告書、ADB作成の文書などで、これらはすべて見ることは可能だ。

(教育法の改革についてはどうですか)

2000年以降でいうと、2002年の改正で職業教育法を新たに作ったし、全体を変えた。これらは学校教育に関連する法律だけで、たとえば教員の社会保障関係法を作ろうとしてもつぶされた。理由は金がないということだった。寄宿舎への入寮者も昔のように2-3割を入れようとしても無理だった。高等教育についてもそれまであった国庫からの援助もなくなってしまった。われわれはこれらを重視したが、大蔵省に反対された。大学は研究しなくてもいい、教育だけやればいい。だから授業料で大学を経営すればそれでいいのだ、といった具合だ。学校教育以外の教育法を作る条件はまだない。

(教育省の内部組織の改革はいかがですか)

以前は、政策の立案機関と実施機関を省内で分けていた。たとえば幼稚園教育という同じ分野であっても、その政策立案組織と政策実施組織が別々だった。これをひとつに統一した。そして政策調整局を作った。この改革は大きかった。また2000年には副大臣制度を導入した。政治機能と行政(実務)機能とを副大臣レベルで調整した。副大臣は教育の全般を見て、事務次官は教育省内部の事務を見る、という分担にした。学校建築のモニタリング局も作った。

(職業教育が現在焦眉の課題になっている。その経緯について伺いたい)

職業教育は90年以降まったく減ってしまった。2002年に職業教育法を作り、その後職業教育の改革が進み始めた。2年前には省内に職業教育指導法センターを作った。また普通高校内部に職業教育コースを導入した新しい総合高校を作った。トブ県のエルデネソムとセレンゲ県のサントに設置した。またアメリカの資金によるミレニアムチャレンジアカウントによる職業教育改革が1600万ドルの援助がついて実施計画をつくり始めている。

(教育行政の地方分権化は進んでいますか)

小学校の設置者はアイマグかソムだと思う。学校管理はアイマグでやっている。アイマグの教育文化局長を教育省の附属機関としたいが、県知事が決める。しかし知事は国家公務員だ。ボルガン、ダルハン、エルデネットのアイマグは、自己収入で教育を維持している。財政上独立している。(分権と集権の組織はいまだ不明確な点が多い)

(1990年以降の時期区分をどう見ますか)

1990年までを第1期とすると、1990-2000年が第2期、2000年以降が第3期になる。第2期は教育がだめになった時期だ。第1期は物的によかったが、2・3期は物的条件が悪化した。

しかし、2・3期は人道的になったし、民主的になった。これら3期を克明に比較すると相違点はいっぱいある。面白いと思う。

(小出コメント)

エルデネスレンは教育行政アドバイザーとしての私のモンゴル側カウンターパートであった。だから彼には私の任期の最初から大変世話になったし、私の職務についてサポートしてもらった。私はツアンジツ教育大臣（現在国会議員）とは1-2回あっただけで、ほとんど仕事上の話をできなかったが、副大臣と話す機会は多かった。初等中等教育以外の分野では特に大学の再編をどうしたらいいかといった質問を受けた。エルデネスレンからは、私の仕事上関係しなければならぬ人を紹介してもらい、おかげで私のネットワークは広がった。

ヒアリングは時間が十分ではなかったので私から個々の質問をしてそれに答えてもらった。以下注目できる論点をまとめてみよう。

第1は、90年以降の時期区分についてだ。答えは大変大雑把で、2000年を境として2期に分ける考え方だ。90年代は教育がだめになった時期で、2000年に革命党が4年ぶりに政権に返り咲いて復興を始めた、といった自党に有利な解釈である。とはいえだから党派的だ、というのではない。大局的には当たっている、と思われる。特に90年代の教育はだめだった、という認識は支持されるだろう。80年代は社会主義時代のなかでもとくに教育が重視された時期で、政策上も事実上も学校教育が拡充され、就学率も拡張してきただけに、80年代と90年代の落差はわれわれの想像以上のものがあるし、90年代の教育の崩壊状況は強調されていい。またこの状況が10年間も続いたということの解明も別に必要になろう。この10年間を“だめな時期”であったと把握し、それに関係した事実の説明、理由、政策の立案過程と実施過程の特殊性、崩壊からの脱出の努力・模索の過程、党派別の政策上の違い、など明らかにする課題は多い。

第2に、2000年にADBの援助で教育省が作成した教育長期5ヵ年計画(Mongolian Education Sector Strategy 2000-2005)についての評価である。この文書は、96年から始まった民主連合政権下の末期に教育省を中心に作成され、国会で承認された計画文書である。代わったばかりの革命党はこの基本政策を引き継ぐ立場にあり、だからこそこの政策文書をどのように評価したか、当時の副大臣に聞いてみたかった。政策の評価は肯定的だが、その実施には相当の無理・困難があったというのはいかにも担当大臣の評価である。あげてある数字も信頼できるものではない、というのも、未熟な統計行政について知悉していたからであろう。ちなみにこの文書には8歳児入学から6歳児入学への移行がかかっていた。しかし代わったばかりの革命党は7歳児入学を提起するのが精一杯であった(2005年9月実施)。6歳児入学を具体的政策として提起したのは2004年6月の総選挙後の革命党と民主連合の連合政権になってからである(首相および教育大臣は民主連合)。

第3は、教育関係法についてである。2005年現在でも教育関係法は、教育基本法、初等中等教育法、高等教育法、職業教育法の4つだけである。日本にあるような教育行政関係法、教育公務員法、教育財政法、設置基準関係法、社会教育法、などはない。教育に関係する法的な整備は相当に遅れている。こうした法的未整備について前副大臣に聞いてみた。答えは簡単明瞭であった。われわれは一部の法を作る努力はしたが、金がなかったし、大蔵省に反対された、というのである。金が保証されなければ法律はできない、というのはおそらく事実であろうが、法律による行政を目指す新しい国家体制としては心もとない回答だった。

第4は、教育行政組織の改革のプロセスについてである。教育省の内部組織、中央・地方行政機構、学校管理の責任行政機関などについて聞いてみた。教育省内部での政策立案組織と執行組織の統合については興味をもてた。そうした組織上・機能上の変化については今後検証したい。中央・地方関係については漠然と分権化が進んでいる、ということで実証的ではない回答だった。アイマグの行政機関は依然として国家機関であり、アイマグ教育局長の任命も教育省がやっている、学校設置者もアイマグなのか国なのかははっきりしない（法制度的には国が設置者）。こうしたことはすべて今後の検証テーマである。

第5は、職業教育についてである。職業教育が最近まで放置されていたこと、現在それが国の急務の課題であることは確認できた。政策のプライオリティについて行政機関内部でどんな変化が生じているかを実は聞きたかったのであるが、時間切れでだめだった。どのような外部の情勢変化が政策変化を生み出し、それが行政機関内部にどのように影響するかについては、この職業教育改革が格好の材料を提供していると思われる。これも今後の課題だ。

いずれにしても、今回のヒアリングは時間的制約からいって、その端緒に過ぎない。またの機会を約束して別れた。

## 2 S・トムルオチル (Sanjbegziin, TUMUR-OCHIR 教育省副大臣)

略歴 アルハンガイ県出身。1950年生まれ。1978年モンゴル国立大・大学院修了。数学・自然哲学専攻。78年モ国立大教員。1992年教育省高等教育局長。1995-96年教育大臣。1996年国会議員（人民革命党）。2000-04年国会議長。04年教育省副大臣

私は1950年アルハンガイ県中西部のウンドルオラン・ソムで生まれた。遊牧民の子どもで上の兄が死んだので長男だった。1958年には遊牧民の経営はネグデル（国営農場・農牧協同組合）に再編された。ソムには幼稚園もなく、私はノーマド（遊牧民）の仕事ですべてやった。子羊の世話は私がやったし、小学生になる前には馬の放牧などもできた。ゲルで育った。次男は7歳下で、私が小学校に入ったときに生まれた。5人兄弟で、次男は運転手で、ほかはみな遊牧民だ。妹が一人いる。母方の父や祖先はラマ教の坊さんだった。

1959年に小学校に入った。ソムの学校は7年制で、66年にはアイマグセンターの学校に移り3年間通った。父方のおばあさんと一緒に暮らした。母の父は坊さんだったから私は小さいときからキリル文字を教わったので、学校では困らなかった。当時オリンピックは数学だけで、第8学年から10学年までは毎年参加し、県ではいつも優勝し、1969年には全国へ出て優勝した。当時は大学の進学先は子どもが希望を出し、大臣が入学先を決めていた。当時の大臣はツエレンといい、モンゴル国立大学の数学の教授だった。私は教員になりたかった。また当時の子どもは外国へ留学したがった。多くはロシアだったが、私の祖父はロシアへは行くな、と言った。中ソ関係が悪く、戦争になる可能性を恐れていた。私は結局国立大の数学科に入った。1969年8月だった。

大学生の5年間はずっとウランバートルにいた。成績は優秀だった。1974年卒業するころ、予想していない状況が生まれてきた。大学に哲学コースが出来、70年はじめには卒業生が出た。社会哲学が中心で、自然哲学ではなかった。しかし国際的には自然哲学が進んだところで、その人材養成がモンゴルでも必要となった。大学にはノロブサンバという哲学の教授がいた。彼は後に“功労教員”賞を受け、科学アカデミーの副総裁になった。理科の学生は当時この人の影響を受けた。その最初の弟子が私だった。

私は73年にこのコースに入り、74年に卒業した。入るためには革命党の許可が必要だったが、私は許可された。卒業と同時に自然哲学の教員資格をとった。74-75年教育大学の自然哲学のプレブの下で勉強した。彼はモスクワの大学を出た人だった。75年には国立大の大学院の試験があり、そのためのコンペに勝たねばならなかった。私は勝つことが出来て、3年間国立大の大学院で本格的な教育を受け、論文を書き、78年に国立大の教員になった。その後は研究室長をしたり、大学の教務担当副学長などをした。

1990年の政変をすぎ、1992年に私は教育省の高等教育局長に招聘され、95年までその職に就き、95年-96年教育大臣をした。96年の総選挙でアルハンガイで立候補し、国会議員になった。2000年の選挙でも立候補し、当選し、01年-04年と国会議長をした。04年10月からは教育省にもどり、副大臣をしている。

高等教育局長の頃は、教育法の制定や改正に努力した。市場経済と接点をもった教育法にしななければならない、1995年の最初の体系的な教育法を作った。これには2-3年かかった。また教育改革のマスタープランを作った。そのための調査もした。大学改革との関連では、私立大学の設置希望が多く出てきたため、その調整を図ったが、審査は厳しくしなかった。大学希望者が入学できるような環境を作った。アクレディテーションの実施については考えなかった。中には設置認可したが、教科書はないし、学生もだめだということで、認可を取り消したこともあった。しかし学生はほかの関係大学へ移れるようにした。

大臣になり、95年法の作成リーダーとなり、教育基本法、初等中等教育法、高等教育法の制定すべてにかかわった。特にアメリカのピッツバーグ大のスボールディング教授の協力を得た。大臣になった頃は市場経済に合わせる動きが始め、最初の国立カレッジを作った。それまで国立大は総合大学と大学の2種類だけだった。

学校教育の新しい内容作りは大変だった。ナショナルスタンダードの作成は私が大臣を辞めてからだったが、それは大学のカリキュラム改革から始めなければならなかった。特に社会・人文科学系が大変で、まず国立大学の教員の再教育からはじめた。国立大の法律学関係者は91-92年ころ3ヶ月で再教育したが、学生の教育はもっと大変だった。経済学は、1年間大学の授業を中止し教員を養成した。アメリカや日本の協力を得た。たとえば日本からはヒロノという経済学者にきてもらった。95年には全大学の政治・経済・社会学の研究室長をソロス財団の金でロシアに送った。30人くらいだった。教科書はロシアの社会科教科書を移入した。それをモンゴルの学校に配った。なぜロシアかというと、当時の大学教師はロシア語しかできなかった。

国会議員になってからは、まず勉強しないとならなかった。教育以外の法律すべてに関わらないといけない。だから勉強した。また国会では全国のことを話し合う。面白いけれどもわからないことが多い。教育法については皆さん知っている顔をするが、現実を知らない。だからほかの議員を説得しないとけない。そのためにも勉強した。国会の委員会は「社会常置委員会」「地方常置委員会」に参加した。社会常置委員会で教育問題が扱われた。それ以外「安全保障委員会」にも出た。これには大統領、国会議長、首相のすべてが参加した。

国会議長になるともっと大変で、すべてを知っていないといけない。論争になり対立した案件については議長が結論を出さないといけない。こうした政治の分野での席次のプライオリティは、大統領、国会議長、首相という順序だった。大統領が反対すれば国会にさし戻される。憲法院（憲法裁判所）が反対すればこれも国会に戻される。国会では必ず政府の意見を聞く。

国会の中で革命党の内部が割れることもある。それをまとめるのも議長の手腕だ。2001年から04年まで国会ではモンゴルの将来にとって一番大事なことが議論された。たとえば土地法や、フリーマーケット、電力の総合システム、地域別の開発政策、ミレニウム道路法、ロシアへの借款返済の停止などがそれだ。

90年以降の教育の変遷を考えると、90-95年はまったくの後退期だった。95-2000年は教育の減びが停止した時期だった。2000-04年は少しだけ回復した時代だ。それでも相当に力を必要とした。

(小出コメント)

トムルオチルは教育及び教育行政だけではなく、一般政治の世界でもエリートだ。1978年モンゴル国立大の教師になり、90年まで研究室長や副学長を経験した。自然哲学を専門とする異色の教師でもある。90年以後は教育省に入り高等教育局長、教育大臣をやり、96年から政治の世界に入った。国会議員および国会議長(01-04年)を務めている。04年以後再び教育省にもどり副大臣をしているが、06年からは教育大臣になることが予想された(04年の総選挙の結果、革命党と民主連合は国会の議席を半数ずつ獲得し、2年交代で大臣ポストを分け合うことになっている)。しかし06年には副大臣のまま留任した。

トムルオチルの場合を見ても、1990年はその経歴上のエポックにはなっていない。大学の行政職から教育省の行政職へ、そして行政の頂点ならびに国民代表へという、この国のエリートの歩みを「政変」とは無関係にごく自然に踏襲している。彼の場合は教育職の経歴より、研究室長以上の行政職の経歴のほうが長い。1990年を境として政治の担当者は変わり、人民革命党の旧エリート層はほとんど去り、革命党内部の新旧交代が進み、若い世代が政治の前面に躍りだした。トムルオチルはその好例といえる。彼らにとって90年以降の市場経済への移行はごく自然の推移であった。

彼のような要人のヒアリングでは、行政文書では見ることのできない社会変化の実相に触れることが出来る。今回も私にとって謎だった教育改革の歴史の一面が明らかになった。それは新教育ナショナルスタンダードの制定(1998年)と関係する。90年に政治変化があり、スタンダードが出来たのはそれから8年たってからだ。これは長すぎる。日本の戦後の場合は1948年には新しい学習指導要領はすでに出来ていた。新社会に移行して3年足らずで作られている。モンゴルでは8年かかった。それはなぜか、その理由・背景がトムルオチルのヒアリングでわかった。

新しい教育内容作りがなぜ遅れたのか。それは、初等中等教育の内容作りの前に大学カリキュラムの改革が不可欠の作業だったということだ。彼は98年のナショナルスタンダード作りは大学のカリキュラム改革から始めたという。特に社会科学の分野は深刻だった。この領域の大学教員を再教育しないと大学教育はおろか初等中等教育の改革もできなかった。なぜならモンゴルではナショナルスタンダードは大学教員が作っているからだ。

91・2年にまず法学の教員を再教育した。経済の分野は1年間学部の授業を停止して再教育した、95年には政治・経済・社会学の分野で研究室長をロシアに送り再教育した。大学の教科書もロシアから移入した。なぜなら当時の大学教員はロシア語しか出来なかった。こうした背景があって新教育課程基準の制定は遅れた。

トムルオチルは1995年教育法の作成過程で中心的な役割を果たしている。95年法は90年過

ぎにできた初めての体系的な教育法である。この法律の内容や特徴について私はまだ検討していないので不明だが、アメリカのピッツバーグ大学のスポールディング教授の影響が大きかったようだ。当時はピッツバーグ大だけでなく、ニューヨーク州立大学、オレゴン州立大学からも関係者がきているので、教育改革当初の頃のモンゴルとアメリカの共同作業などについてもトムルオチルから今後聞き出したいと思う。

また国会と教育省との関係についてもヒアリングを続けたいといけな。彼は民主連合政権と人民革命党の政権時に国会議員をしていたので、90年代後半と2004年までの国会における教育問題の争点については十分知悉している。98年、2000年、02年の教育法の改正経過についても聞いてみたい。

最後に彼のこの15年間の時期区分は面白い。ほぼエルデネスレンの時期区分と似ているが、95-2000年を「教育の減びが停止した時代」と把握しており、改革が始まった時期とはとらえていない。この点では後述のベグツ教育研究所長とも異なる。行政文書から見た時期区分と現実世界での時期区分とは異なる。この辺のトムルオチルの判断についてもこれからのヒアリングに待ちたい。

なおトムルオチルについて私の個人的な評価について付言しておきたい。彼は04年の総選挙の結果エルデネスレンに代わって教育省副大臣になった。彼が任命されたのは総選挙から半年後の12月だった。この間は副大臣不在の時期であった。私がトムルオチルに最初に会ったのは年末年始の日本帰国からモンゴルに戻ってまもなくの05年1月20日だった。この会見は印象的だった。私は会見の中で国立大と教育大にできた4つの指導法改革センターについて、ここをモンゴルの教育改革のセンターにしたい、と話した。彼は即座に4センターを訪問したいといい、1週間で見て廻った。私は同行しなかったが、彼の4センターについての評価は驚くほど正確だった。また弱点を見抜く力もあった。改善の方策を出す判断力も鋭かった。その結果4センターを総合調整する運営委員会が発足した。その議長を彼が買って出た。各センターの弱点を率先して指摘し議論をリードした。私がかねて考えていた課題が直ちに現実のものになった。これだけの判断力と実行力をもつ政治家を私は日本でも見たことはない。率直に言って私はモンゴルの将来を彼の中に見出した思いであった。

### 3 R・バタエルデネ (Regsuren, BAT-ERDENE 教育省教育局長)

略歴 アルハンガイ県出身。1958年生まれ。1982年モンゴル国立大卒業(物理学)。82年国立教育大教員。84年国立教育研究所。87-2000年教育省職員(高等教育委員会)。2000年ピッツバーグ大学大学院留学、博士号取得。04年教育省教育局長)

1958年私は地方のアイマグセンターで生まれた。兄弟は8人で、私は3番目だった。幼稚園は行かなかった。小さいころはよく引っ越したが、小学校のときアルハンガイにいた。父は教員で、私が小学校に入学したときは、教育局長をしていた。また小中企業の協会の書記官をしていたこともある。私はよく「行政職(管理職)の子ども」と呼ばれた。父の仕事の中身はわからなかったが、なにか重要な仕事をしていることはわかった。

父の影響は大きかった。父の先祖は貴族(僧侶)だった。父の父は1937年に殺された。父が9歳のときだった。父は苦しみ、坊さんになろうとした。寺にいたので識字教育は受けていた。1945年に父は軍人になった。軍人に識字者は少なく、父は重宝がられた。管理職に就き、50年まで軍にいた。そのころ革命党は教育者を党内に入れ、利用しようとしていた。父は革命党の

大学(現在の行政アカデミー)に3-4年間入れられた。教師はほとんどロシア人で、1日100以上もの単語を覚えなければならなかった。そして父は革命党の地方機関に勤めた。アイマグセンターは人口が少ないので、お互いよく知っていた。父は偉いので、私はいい子でないといけなかった。責任感も強くなった。

センターの10年制学校の教師は優秀で質がよかった。私は質の高い教育を受け、成績もよかった。小学校1年は4クラスあったが、第7学年の中学のとき試験があり、それに合格しないと高校へはいけなかった。高校は1学年1クラスだけで、生徒はこの間にだいぶ振り落とされた。落ちた子はネグデルに就職したり、職業教育訓練センターに行った。10年制学校ではクラスメートが変わらないので、いい友人が出来た。共同性も高く、お互いいい影響を与えあった。私はクラスリーダーだった。

1976年私はモンゴル国立大の物理に入った。優秀な学生が集まっていた。いろいろな地域から来ており、ドキドキして勉強した。物理からは政治家になった人が多い。いま科学技術振興基金の総裁をしているツオフーさんが担任だった。高等教育局のバトリンチン(P・Batrinchin)も教師だった。教育大のB・ジャダンバ学長(B・Jadamba)は4年上の先輩だった。いま国会議員のバタウールや大蔵大臣のアルタンホエグもクラスメートだった。しかしうちのクラスからは革命党の政治家は出なかった。当時の大学生は政治のことは考えなかった。アルタンホエグが中心となり、寮で共同生活をした。物理について議論したことが多く、ほかの事はあまり議論しなかった。

77-82年のあいだイルクーツクの大学に留学した。高等教育委員会で試験を受けた。ADBのバンデイ(R・Bandii)も一緒に受けた。彼は経済大からモスクワに行った。私は82年に卒業したが、教育大に幼稚園教員養成所ができ、そこの物理の教師になった。アルハンガイ出身のジャグダルスレンが学長だった。彼は後に「功労教員」賞を受けた。管理能力は高かった。

私は84年に国立教育研究所(Pedagogical Institute)の試験を受けて、短大政策担当の研究職員になり、3年間勤めた。所長は有名なナツァグドルジで、優れた人だった。そこで私は研究計画や教育セクターの計画を立てることをならった。今の教育研究所のベグツ所長(証言6参照)は教育省の国際部長をしていた。教育省と研究所はひとつの機関のようだった。

当時は教育省の上に高等教育委員会があり、こちらのほうが省より上の機関だった。私はこの委員会に勤めた。高等教育委員会の委員長はガルサンだった(証言7参照)。彼はよく「学習は自分からしろ」と強調した。85年以降ロシアでは指導法はひとつではない、いろいろある、という主張が流行した。この頃から教育を見る目が変わった。子ども中心の視点がでてきた。ロシアでも多様性が言われ始め、モンゴル教育研究所でもそうになった。ガルサンの発言はそうした流れの一環であった。

87年には高等教育委員会と教育省が一体化した。その結果私も教育省の職員となった。私の上司は食料テクニカルカレッジの現在の学長であるバラムサエで、この人にはいろいろ教えられた。行政職員として力があつたし、新しいものを取り入れた人だった。88年に高等教育委員会と科学技術委員会が合併して、ダシさん(故人)が会長になった。この頃よりモンゴルでもペレストロイカが始まった。今まで自分の目で見えなかったことが見えるようになった。社会は動き、不安定になった。ダシさんの下には二人の副委員長がいた。その一人がエンヘトブシン(B・Enkhetuvshin 今の科学技術局長)だった。彼は今の教育改革の基礎を作った人だ。優秀で新しいものを取り入れた。ダシさんは「自分で解決の仕方を考えろ」「自分で課題を見つ

け、自分で解決せよ」と言った。彼は農学者で、科学技術に強く、平等な人だった。

89年頃になるとダシさんは「各機関は自分の責任で自分の機関を運営しろ」と主張した。たとえば殺されたゾリグなどと呼びつけ「お前たちは何をしようとしているのか」と正した。国立大の数学の教授のラムジャグなども質問をうけ、彼は「民主社会をつくる」「民主党を作る」などと答えていた。この頃は次の道をさがしはじめた時期だった。あるき方を変えようとしていた時期だった。このように部下の自主性を高めようとした省はほかにはなかったと思う。省内には革命党の組織もあり、そこも動き始めていた。

89年にはさらに動きがはっきりしてきた。国立大学の日本語学科の建物の前に人が集まってきた。看板にいろいろな主張が貼られた。物理や数学の人が多かった。私も物理出身なので、よくそこへ行った。私の同級生も来ていた。民主党のバーバルもいたし、国会議長のゴンチグドルジもいた。90年3月にはモンゴル民主党が結成された。運動が積極化して、ハンストもおきた。5月には初めて総選挙が行われ、新政府が出来た。教育大臣はウルトナサンで、副大臣はエンヘトブシンだった。教育改革をもっと推し進めようという動きとなった。人間の権利の尊重を中心とする法律を作ろうとなり、92年教育法が出来た。

新しい動きの中心スローガンは“多様性”だった。91年にモンゴルビジネスカレッジから設立の申請があったとき、教育省の人はみなびっくりした。創設者のエルデネスレン（のち教育省副大臣、現在国会議員、証言1参照）は、「今までは党の考えで大学を作ってきたが、今度自分の考えで大学を作りたい」と言っていた。私は大学の設立認可の部署にいた。当時はビジネス大以外に、音楽大と体育大とが申請された。3つとも大臣委員会にかけて通った。国立大も3段階に分けた。総合大学、大学、カレッジの3つだった。

91年に入り、アメリカのピッツバーグ大より Seth. Spaulding 教授をモンゴル外務省が招聘した。彼は国連の組織に関係しており、モンゴルとも国連を通じて関係があった。彼には教育セクターをどのようにしたらいいか、その評価を依頼した。教育省に短期間来てもらい、私とエンヘトブシンがその衝に当たった。彼は案件を二つに分けた。高等教育関係者の人材養成の必要と高等教育の調査の必要についてであった。前者についてはアメリカ政府に依頼し、後者はADBに依頼した。その結果92年に私（バタエルデネ）とエンヘトブシン、チョロンドルジ（人文大学長）の3人が45日間ピッツバーグ大に行き、講義を受け、視察をしてきた。またADBからは小西が調査に来た。92年8月だった。われわれはピッツバーグ大より「5つの伝言」を言い渡されてきた。それは、アカデミック・フリーダム、大学の自治（Institute Autonomy）とその実施機関、学位システム、単位制度、アクレディテーションの5つの改革だった。これに対しては科技大のような力のある大学は受け入れたが、多数は反対だった。

なお92年教育法については、プレブドルジ（教育大）やワンチグスレン（D・Vanchigsuren 国立教育研究所）に聞くといい。違った立場から対応してくれる。

（未完）

（小出コメント）

バタエルデネ（R・Bat-Erdene）は、1990年代の教育改革を推進するにあたり教育省職員の中核スタッフとして関わってきたが、2000年の総選挙で民主連合から人民革命党に政権が移ったとき教育省を辞し、アメリカのピッツバーグ大に行き博士号を取得した。04年の総選挙の結果革命党と民主連合が共同して政権を担当することになり、バタエルデネは教育省に復帰し（10

月)、教育局長となった。教育局は、新政権による省内組織の再編により従来あった高等教育局と初等中等教育局とが統合されてできた新しい部局である。彼はその局長に採用された。

上述の記録からわかるとおり彼の叙述はきわめて詳細で要を得ている。それに私にとっては随所に新しい発見があった。1990年にいたる数年の動きが鮮明な形で復刻されている。教育改革の人事の脈絡などもはっきりしている。

私を驚かせたのは1990年に至る数年の動きについてのバタエルデネの描写である。すでに紹介したネルグイ(証言5参照)やブルマーさん(証言9参照)の描写とは違う。彼は90年の数年前からの変化に気づいている。高等教育委員会会長のガルサン(1985年更迭, 証言7参照)やダシさんとの職場での接触の話が興味深い。ガルサンからは「学習は自分でやれ」といわれた。つまり学習や学習方法は多様な道があっという、ということを言われた。学習内容と方法の多様性がすでに85年前後から強調されていたのだ。ダシさんからは、各行政機関は「自分で自分を運営しろ」といわれたという。行政における権限と責任が下部機関に積極的に移されていることがわかる。これが88年すぎだ。両方ともにトップダウンの方式が否定され、ボトムアップの行政手腕が機関内部で求められていたといえる。ダシさんから意見を求められたある職員は「民主社会を作る」「民主党を作る」と答えている。こうした話が職場によっては半ば公然と話し合われていたのである。90年の政変に至る水脈はモンゴルの国内でつくられつつあったのだ。

モンゴル国立大学の日本語学科がある建物の前での89年から90年にかけての公衆の動きも面白い。いろいろな主張が公然と掲示板に貼られ、その前で意見が交流される。物理と数学の大学生・大学院生が多かったようだし、バダエルデネのような行政機関の職員も集まっていたようだ。その多くは現在の国家機関の枢要な地位にいる人たちだ。若きエリートたちがサロンからパブリックの場に出てきている様子がわかる。このあとスフバートル広場に多くの人々が集まり、政治の転換を要求した。人民革命党の政治局員が全員辞任するのはもうまもなくだ。

90年の変化をバダエルデネは教育省で経験する。91年の憲法改正で自由になった私立大学の設置認可に彼は関わるが、92年にはピッツバーグ大学に45日間派遣され、大学行政・大学管理の実際を見てくる。これも私にとっては発見であったが、90年代前半のモンゴルの教育改革にアメリカはかなり影響を与えている。彼が紹介したスポールディング教授(S・Spaulding, ピッツバーグ大学, 行政・政治学, 国際開発教育)だけではない。教育改革マスタープランの作成やそれ以前の調査報告書の作成には、ニューヨーク州立大・アルバニー校のD・M・Windham, F・M・Kemmererや、オレゴン州立大のL・J・Kenneke(技術教育)、ラトガーズ州立大のW・A・Stuart名誉教授などが関わっている。

バタエルデネがピッツバーグ大学から持ち帰ったという大学改革の5原理についていえば、これらの原理が実施されるようになったのは遅い。当時の大学は教育機関であって研究機関ではなかった。研究は科学アカデミーの仕事とされてきた。だからアカデミックフリーダムといってもその主体はできていない。大学の自治原理についても、大学と教育省は分離されておらず、教育省に大学は包摂されていてその自主性はなかった。また教授会のような独立した機能を持つ合議機関は現在もない。したがってこの原理の実現も条件がない。単位制度の導入は選択科目が広範にないと実現性がない。一般教育課程ひとつとって見ても一つの学部だけでは無理で全学的な教員の協力関係がないと難しい。学部の狭い縦割りによって大学が構成されている状況下ではこの制度の導入も難しい。結局アクレディテーションの導入が比較的早く実施された

が、それは1998年になってであり、それも施設評価 (Institute Accreditation) が中心で、教育課程を中心としたプログラム評価 (Program Accreditation) は2004年になってからである。こういうわけで改革原理の導入・紹介は早かったのであるが、実施過程を見ると実現の条件をつくるのがいかに難しいかがわかる。

バタエルデネのヒアリングは途中で終わっている。1990年代後半ならびに2000年に入ってからそれは未完である。次回にまわしたい。

#### 4 N・ネルグイ (Nerendoo NERGUI 教育省教員研修マネジメント専門官)

略歴 ウランバートル出身。1953年生まれ。1972年モ国立大入学 (化学)。1973-79年モスクワ大学。1979年国立大教員 (化学)。1992年教育省理科教育専門職員。現在教育省教科書専門官

私は1953年10月22日にウランバートルで生まれた。この日は特別の日で、「冬のはじまり」を意味する。私は私の誕生日を誇りに思っている。ネルは「名前」の意味で、グイは「ない」という意味だ。私は「名前がない」という子どもだ。私の前に二人子どもが生まれたが、いずれも死んだ。だから親は私を「名なし」と付けた。私の後には7人いる。

第3学校に入学した。私はクラスで一番小さかった。3年までウランバートルにいて、そのあとセレンゲ県のロシアとの国境に近いアルタンブラクに引っ越した。父は会計の仕事をしていて、いい仕事を求めてよく移動した。そのあとはトブ県に移った。母は小学校を出ただけだった。彼女はその時どきのニーズにあった仕事をした。コックとか列車の中の売り子とかだ。父は友人がトブ県に多く、夏はトブですごした。私は、馬に乗り、乳製品を作れる女の子だった。「仕事の上手な子」といわれた。特に裁縫が好きだった。材料は自分で買ったし、ドレスなど自分で工夫して作った。人形なども作り、友達と交換した。本が好きでたくさん読んだ。本の中の人物のようになりたかった。夢の多い子だった。特に先生になりたいくて、近所の子を集め、私が先生や校長になった。夏はストーブの上やミシン板にチョークで書いた。親は怒らなかった。祖父も含めいい人たちだった。成績はまん中よりちょっと上くらいだった。近所ではリーダーだったのに、学校では恥ずかしがりやでおとなしかった。

モンゴルは、社会主義を作ろうとした。幸せな時代だった。日本の戦後のような問題もなかった。貧乏もなかった。ゲルで暮らし、失業も心配しなくてよかった。病気の人も少なかったと思う。私は歯が弱かっただけだ。兄弟7人だったが、病気のときは母が面倒見た。私が下の子どもの世話をした。母が出産で入院したときは、私が赤ん坊のうぶぎを作った。

学校はいい機関だった。私は学校に行きたくて行きたくて仕方なかった。不登校など考えもしなかった。授業以外の活動のリーダーになった。コンサート、演奏、司会、朗読など楽しかった。私はマイクを使うのが上手で、学校代表としてあちこちの学校に行き朗読した。話すのが好きで、テレビキャスターになっていたかもしれない。先生になってからだが、私の授業が一番よかったといわれた。

トブ県のソムでは寮に入っていた。いい学校だったが、中学の卒業生はみな職業訓練センターに進んだ。私は8学年のはじめにアイマグセンターに移った。だから私は大学へ行くことが出来た。私は数学が優秀だったから高校へ入れたし、アイマグの数学オリンピックではいつも優勝した。教師にほめられ、それでもっと勉強した。あるとき地方から優秀な生徒を集めて黒海の子どもキャンプ場に送られた。初めて飛行機に乗り、汽車に乗り、海を見た。

当時の子はみな平等に勉強した。クラスメートは24人だった。出来る子、出来ない子の差別はなかった。早いか、遅いかの違いだった。私が自信を持ったのは数学で、暗記が強かったので暗記だけで勉強した。物理・化学の授業はできなかった。当時テキストは家で買っていた。ほとんどの家を買えた。私の家は弟や妹のテキストを買うのが大変だった。私は夏アルバイトをした。洗濯や料理の手伝いだ。1ヶ月に50-70 Tg稼いだ。これで自分の必要を満たした。

10年制学校ではどんな人になりたいか決められなかった。高卒の頃、大学の進学希望を決めなくてはならなかった。ちょうどロシアへの留学募集があり、応募し、合格した。これにはモンゴル国立大学での1年間の体験コース(予科)を受け、そこで具体的な学習コースを決めなければならなかった。私には社会学と化学のコースが割り当てられ、化学を選んだ。モスクワに5年間行き、化学を勉強した。当時は学習のコースを自分で選ぶことはできなかった。

当時のいい点は、力のある子が伸びることが出来た、ということだ。教育もハイレベルだった。私はロシアの大学では第1学期の試験はすべて不合格だった。ロシア語が不十分で、大学の授業についていく語学力がなかった。教師はもう1度体験コースをやり、ロシア語を鍛えろ、といてくれた。私は人生で初めて不合格を経験した。精神的にも大変だった。親には話せなかった。ロシア留学が決まったとき親はそれほど喜んでくれたが、その後は母親はがんばってくれた。だから話せなかった。体験コースの教師はいい人だった。ロシア語が出来るようになり、教科の再試験を受け合格した。

ここでロシアの大学制度について3つのことを言いたい。第1は、モスクワ大学は学生の健康状態に注意した。3学年までは体育の授業があった。これは私によかった。自分のレベルがわかり、それに合った教育が行われた。これは大事なことだ。第2は、試験も難しく、実験もレベルが高かった。努力しないとついていけなかった。実験結果を出すために1ヶ月以上かかった。一つでも悪いと全体がだめになる。だからひとつでも質を悪くしない。「いそぐより、きちんとしたものを作る」。これが私の流儀となった。第3は、「学生にいい教育を」という教師の気持ちが大変だということだ。こうしたことを私は学んだ。

1979年、26歳で私は帰国した。結局モスクワに6年間いた。卒業前に結婚しており、子どももいた。帰国後の私の勤務場所は高等教育委員会が決めていた。モンゴル国立大学の化学研究室で教師になった。ここに14年間勤務した。ロシアの大学では指導法や心理学を教えなかった。だから私はこの新しい職場で苦労した。授業をわかりやすくしなければならなかった。ドンドグという先生がいて、授業の仕方を教えてくれた。彼から多くを学んだが、その教え方が気に入らなかった。ドンドグは自分だけが実験し、学生には見せるだけだった。学生はポケットに手を突っ込んだままだった。

そんな時1982年頃数学のドヨド教授に会った(証言8参照)。指導法をどうしたらいいか話し合った。ドヨド教授はモスクワ大で心理学を学んできていた。こうした指導法の学習をお互いボランティアでした。数学教師のジャグダルの家でセミナーをした。モスクワからの参考書も読んだ。当時情報はロシアからしか入らなかった。ヴィゴツキーやピアジェの理論を学んだ。学習の仕方について調査し研究した。学習の原理を学んだ。

1986年ドヨド教授はモンゴル国立大とモスクワ大学との協定により、10ヶ月間モスクワで研修をしてきた。この間レーニン図書館で勉強した。しかし教授の長男が病気になり、4ヶ月で帰ってきたが、いい資料を持ち帰った。それからオユンツエツエグ(化学)、グラライジャムツ(数学)、ガンバット(物理)、ダルジャー(化学)、ブルマー(物理)などがこのグループに入って

きて、週1回セミナーをやった。これはオープン・セミナーで、やめてもいいし、残ってもよかった。ここでの話し合いを授業に生かした。研修生のなかにはニャムゲレルもいた。

1992年、物理のブルマーが教育省にいるとき、理科教育の専門家がほしいとやってきた。うちのセミナーから誰か出せないか、ということだった。ブルマーは私に来てくれと言った。今まではボランティアでやってきたことを、ここで正式なものにしようというのだった。私は当初断ったが、移ることにした。そんなわけで1992年12月30日に私は理科教育担当専門家として教育省に移った。

ここで私が国立大学にいた14年間の成果について4つのことを言いたい。

- 1 私は、国立大の科学教育センターの創設者になった。このセンターは正式には2001年に規則により定められ、大学の公式機関になったが、それまでは非公式施設として役割を果たしてきた。その創設者は私とドヨド教授だった。
- 2 私は、モンゴル大学の化学教育の仕方を改善した。ダルジャー、グライジャムツ、ニャムゲレルなどに新しい指導法を教えた。1998年には化学教育の指導法をテーマにしてPhDをとった。今年初めて第11学年の高校化学の教科書にこうした自分の考え方を入れた。これは私の14年間の仕事のまとめであり、その成果である。世界に出しても注目されるものと思っている。
- 3 私は国立大学の若い研究者・教師の集まりのリーダーでもあった。たとえば1987年頃だったが、若い教師35人にアパートを新設することになった。当時大学の副学長はトムルオチル(現教育省副大臣、証言2参照)だったが、国立大から私が建設企画委員会に参加するように言われた。昼間勤務し夜この仕事に参加した。住宅の内部の設計を自分たちでした。私は片道10キロの距離を通っていた。こうしたことは当時だから出来たことだと思う。今はできない。
- 4 私はずっと初等中等教育関係の仕事をしてきた。教育内容とナショナルスタンダード作り、教科書作り、教員再教育などに関わってきた。教育省にうつってもこの分野で自分のやりたいことを実行できる空間があった。自分で研究し、自分で指導法を開拓してきた。この分野の政策作りに貢献してきた。私は昨年JICAの援助で8ヶ月間フランスに行ってきた。ユネスコが援助している教育計画研究所だった。そこで私のしてきたことを報告した。私は、私の化学教育の指導法が国際的に見て遅れていないことをそこで知った。

私が今後したいことが二つある。

ひとつは“Education for All”の目的を実現したい。それをやれる専門家を育てたい。教育省の中でそうした力のある人を育てたい。二つ目は、現場の教師をサポートしたい。現場教師に有効な指導法を作り出したい。この二つのことをして教育省を退職したい。教育省の人事は政党で選んではいけない。実力者を選ぶことが大事だ。11年制学校がスタートする。有用性をどう教えたらいいのか。そのための学習環境をどう作るか。課題はいろいろある。

私の母は80年になくなった。それから私は妹や弟の世話を見て、家を立ててやり、就職の面倒も見た。その頃私は大学にすでに10年以上勤めていた。10年以上勤めると革命党の党員にならないといけないと思う。1年間準党員をやって、党員になる。1990年当時各機関には党の部屋があった。そこでは誰が党員になるか会議が重ねられた。外ではデモが、中では党をどうするか、という話がされた。私も党員になるよう言われた。私は「ならない」と返事をした。何人かは党員となり、名前が貼り出された。私はならなかった。このことが教育省に移るとき、

よくも悪くも作用した。市場経済に移行し、民主化が図られる。迷っている人は多かった。しかし党はしっかりしていない。だから入らなかった。このような私みたいな人が多かった。

“1990年”は、私にとっていい意味があったし、いい影響があった。これによって世界全体を見ることになった。いろいろな制度を見ることができた。世界は小さい。自分で考えてきたことを実験・実証できた。この新しい社会は人間に機会を与えてくれる。この機会を自分のためだけに使うのか、人のために使うのか、国のために使うのか、それは人によってちがう。

(小出コメント)

ネルグイさんは教育省の中では教育課程改革の専門官であり、2005年に施行されたナショナル・スタンダードの作成、それにもとづくガイダンスの編修、新教科書の編集・刊行・検定など、新教育課程の改革と実施を指導してきた中心人物である。また新課程の実施に伴う現職教員の再教育の企画・実施にも当たってきた。そういう意味では2000年に入り本格化したこの国の教育改革を、教育課程行政から支えてきた人であり、彼女のキャリアに対しては私は格別の関心を持っていた。

彼女もこの国のエリートの例に漏れず数学を得意としてきた。しかしモンゴル国立大学およびロシア留学での専門分野は化学であった。1979年ロシアでの留学を終え帰国し、29歳で国立大の化学の教員になる。私の関心を引いたことは、彼女は教師になり直ちに指導法に関心を持った、ということだ。これは社会主義時代にはあまり例がないと思われる。教育内容は決まっており、テキストも決まっている。学生はそれを修得すればいい。決められた内容についてのアチーブメントを高くすればいい。したがって教師は成績のいい学生を対象にする。これが一般的な趨勢だといえる。しかし彼女は指導法に関心を持った。上司の教授は自分で実験するだけで学生にはさせない。したがって学生は実験実習能力を持たないし、疑問も持たない。彼女はこんな指導法に疑問をもつ。

幸いなことに彼女は3年後数学のドヨド教授に出会う。ドヨド教授も指導法に関心を持ち、自らも実践していた(証言8参照)。それは1982年だった。この時期ロシアにおいて指導法の研究がどのような状況にあったか私は門外漢で知らないが、バトエルデネのヒアリングからわかるように、1985年ころロシアでは指導の多様性について注目されていたのであり、二人の動きはこうした時代の趨勢を反映していたといえよう。こうしてドヨドさんとネルグイさんはロシアから学びつつ独自の指導法を開発することになる。

二人の研究は90年までには数学・物理・化学の分野で共同研究者を集めた。それは科学教育センター(Science Education Center)として次第に形を成し、2001年には規則化され、国立大の公式の機関となった。このセンターがモンゴルにおける教育課程研究のセンター的地位を獲得し、その後の教育課程行政をリードすることになった。私がモンゴルに行くことになり、着任直後に開いた教育省主催の研究会で、私は大学に諸科学の専門研究者、教授学者、学校教員、大学院生を集めた実験的な指導法開発センターを作らないとだめだと強調した。そのときすぐに反応したのがこの科学教育センター長のブルマーさんだった。その場にはネルグイさんもいた。ネルグイさんは私の話にもっとも質問を投げかけていたことを思い出す。

私の今回のヒアリングでネルグイさんの指導法の特徴について明らかにすることは出来なかった。これはドヨドさんについても同じだ。ネルグイさんについては、彼女が執筆・編集した高校化学の教科書がまもなく刊行される。この教科書は彼女の指導法を集大成したもので、

おそらくこれを見れば彼女の指導法の特徴がわかるだろう。彼女が昨年10ヶ月行っていたフランスのユネスコ付属教育研究所では、彼女の化学の指導法が高く評価されたという。そのときの話も次回のヒアリングでは聞きたいと思う。

私は彼女のキャリアや、また教育省内での地位からいって、彼女は当然に革命黨員かと思っていた。しかし違っていた。黨員になるかどうかで彼女も迷ったことがあるとヒアリングで話している。特に幼少から青年期にかけての社会主義時代の学校生活に対する彼女の想いは熱い。現在の学校にはないいい面についての郷愁が率直に語られている。社会主義に対する反感もない。とはいえ社会主義を指導してきた人民革命党の評価になると厳しい。「党はしっかりしていない。だから入らなかった」と彼女は言う。しかも彼女と同じように考える人はほかにも大勢いるという。モンゴルの教育改革を支えているこういった人は教育省や地方の教育行政機関の中にいる。彼らの存在は貴重だ。こうした人たちを見ると、政治と行政の関係、行政と教育の関係についてそれを担う新しい芽が育ちつつあるように思う。

## 5 M・バーサンジャブ (Mijid, BAASANJAV 教育省情報検査モニター局長)

略歴 ゴビアルタイ県出身。1954年生まれ。1977年モ国立大卒業(数学)。77-87年国立大ホフト分校教員。87-90年モスクワ大学留学、博士号取得。90-96年国立大教員(数学部長)。96-04年教育省高等教育局長。04年教育省モニタリング検査局長。

私は、1954年ゴビアルタイで5番目に高い山のふもとで生まれた。山から流れる川があり、そのほとりの遊牧民のこどもだった。家畜は200頭くらいだった。アイマグセンターからは150キロ、ソムから50キロ離れていた。父はハリオン・ソムの会計担当職員で、遊牧も兼ねていた。ソムの4年生学校に入学し、中学はアイマグセンターの学校に移った。しかし6年生のときソムに8年制学校が出来たので、ソムにもどった。高校はアイマグセンターの学校で、卒業したのは1972年だった。それからウランバートルの国立大の数学に入った。ドヨド、ジャダンバなどの先生に教わった。エルデネスレン(教育省副大臣、現国会議員)やツォフー(科学技術基金総裁)、トムルオチル(現教育省副大臣)などは2年先輩だった。77年に卒業し、ホフトの国立大分校の教師になった。高校や大学の卒業証明は“赤いデイブローマ”をもらった。

1987-90年にモスクワに留学した。ちょうどペレストロイカの頃だった。ロシアの学生はすごかった。指導者がいて、民衆と話をしていた。エリツインなども若かった。私は3年間でドクターをとらないといけなかったので、勉強した。しかしモンゴルも変わらないといけないと思った。ほんとに面白かったし、びっくりした。若かったので反対もしなかった。留学のとき私は黨員ではなかった。当時、物理・化学や数学は黨員でなくても留学できたが、社会科学は黨員でないとだめだった。私は1990年にモスクワ大でPhDをとった。メカニカル・マスで、確率だった。2000年から01年までフランスに行き、ユネスコ付属の研究所で、教育計画研究所といった。ここへは、ネルグイさん(教育省教育課程専門官)も、バンデイ(ADB)、ゲレグジャムツ(バトボルド初中教育局長の下僚)も行った。

以下では私が主として歩んできた高等教育の改革の経過を話したい。

1996年から教育改革が本格的に始まった。私は96年までは国立大の数学部長をしていたが、96年からは教育省に入り、高等教育局長をした。市場経済へ移行し、国は国立大学に予算を出すことが困難になった。自己負担を強いざるを得なくなった。教員給与、光熱水費、社会保険、奨学金など出せなくなった。国は教育セクターの計画化をするため、1995年、98年、2000年、

02年に教育法を改正した。高等教育法のスタートは95年だった。これらは社会のニーズに応じて改正した。大学は授業料をとって、自己経営、自己開発するようになり、教育省と大学とはそれぞれ活動を分担した。大学に運営委員会をつくった。従来国が大学を指導していたが、大学が独自に運営できるようにした。学長を中心に親や学生も参加できるようになった。これらの改革目的は、アカデミック・フリードムの実現であり、大学の民営化だった。

96年くらいから私立大学が急増した。それとともに教育の質の問題が出てきた。アクレディテーションが必要になった。外国の経験についての調査・研究をはじめた。97年にフィリピンに関係者10人を送り、これらについて調べた。私がリーダーで、チョロンドルジ(人文大学長)、ドルゴルジョム(バガバンデイ大統領のアドバイザー)、ドルジ(D・Dorj 国立大学長)、バタムフ(科学技術大)、ムンフグライ(教育研究所)、バタジャルガル(A・Batjargal 経済財政大学長)、バタリンチン(P・Batrinchin 教育省)などが参加した。3週間調査し、帰国し、制度化し、98年からアクレディテーションを実施した。オトホンテンゲル私立大や科学技術大学(国立)が最初にクリアした。最初は高等教育局が審査した。その後アクレディテーション委員会を設置し、ADBの金で科技大の中に事務所を作り、さらにアクレディテーションの独自の役所を作り、専門家もやとった。

アクレディテーションには2種類あり、ひとつは施設・設備の評価(Institute Accreditation)で、他の一つは教育プログラムの評価(Program Accreditation)だ。98年からはじめたのは前者で、これは今も継続している。後者は昨年の2004年から始めたもので、これは大学ではなく学部・学科単位でやっている。アクレディテーションは大学に強制していない。あくまでも自己レビューが前提になっている。自己評価がまずあって、次に第3者評価(エキスパート・グループの評価)、最後に委員会審査がある。現在この委員会は教育研究所の中にある。

私立大学問題は一番大きな問題だ。急増した私立大学に対する国のサポートをどうするかという問題だ。これはまったく新しい分野の問題で、国には経験がない。問題は、大学教員・職員の人材開発と教育内容の向上だ。現在大学共同キャンパス構想を検討中だ。私立大学に共通する課題を、共同して解決しようという構想だ。共通カリキュラム、学生寮、運動場などは共通に対処していい。そうすることで小さい大学も助かる。しかし実際はうまく進まない。それぞれの大学には個性があり、私大だけではまともまらない。国のサポートが必要だ。しかしその具体案はまだ出ていない。これからの課題だ。

国立大学の問題は、民営化だ。40ある大学を8大学くらいに縮小したい。これは始まったばかりで、簡単ではない。民営化といってもいろいろある。マネジメントの民営化が最初だ。財政経済大学がこれをやっている。契約により国立大学を民間が買い上げるやり方もある。人文大学はこれを2年間でやった。

大学院の改革もこれからだ。大学院の教員の質が悪い。教育研究環境も国際水準に達していない。設備や技術の条件は遅れている。研究もなかなか進まない。指導者が少ない。外国でMCやDCを修了し、学位をとった人が指導している。しかし彼らの研究条件も悪い。モンゴル国内で出す学位の質も国際的には低いレベルで、信用がない。理論レベルでは進んでいるが、実験・実証レベルで落ちる。お金がないので仕方がない。大学は教育機関で研究機関ではないという古い考え方がまだ残っているが、これは間違いだ。しかしそれを克服する条件を作ることが大変だ。

(小出コメント)

バーサンジャブは96年に高等教育局長として教育省に入り、以来2004年末まで8年間一貫して高等教育局長の任にあった。この間民主連合の内閣及び人民革命党の内閣に仕えた。したがって彼は教育省の局長としては数少ない無党派の人だ。また1990年代後半から現在に至る高等教育改革についてはもっとも知悉している。時間は十分取れなかったが、高等教育改革を中心にヒアリングをした。

彼は96年から本格的な教育改革がはじまったという。教育改革の本格的な開始の時期をいつにするかは人により違う。バーサンジャブの場合は96年だという。ちょうど教育改革のマスタープランが出来て2年たった時期だ。大学改革でも4つの方針がマスタープランでは提起されていた(小出「モンゴル国における高等教育改革と大学」参照)。**①高等教育機関の統合・合理化**、**教育・研究の統合**、**大学の民営化**、**②大学の自治の拡大**、**国の財政援助の廃止**、**私学設置の奨励**、**③アクレディテーションの実施と大学の質の向上**、**④大学における経営スキル**、**ビジネスマネジメント・スキル**、**起業家スキルの向上**、などであった。

しかしこれらの課題の実現には凹凸がある。彼のヒアリングからもわかるように国立大の民営化、プログラム・アクレディテーション、私学の再編はまさに現在の課題であり、まだ実現されてはいない。大学の自治の拡大は国からの資金援助の廃止であり、大学の研究教育の拡充とは程遠い。4番目の経営や起業スキルの向上は私学による経営・会計・財政関係の学科の乱立状態を生み出し、市場経済への移行が必要としている本格的な人材形成に成功しているわけではない。特にグローバル社会への移行に必要な人材については遅れている。バーサンジャブはそれほど語らないが、課題の提起と実現との間に多くの乖離がある。こうした問題について今後のヒアリングでは聞きたい。

バーサンジャブは課題の指摘については明快だ。しかし課題の解決については具体性にかける。どうしたらいいか、という問題についてははっきりしない。私立大の共同キャンパス構想についても、ゴールがどこにあるか不明だ。これは多くの私大からの要請であるが、彼は私立大学間の対立で結論を出せないと言っている。しかしこれは3年前に出されている案件で教育省の結論次第になっている。大学院改革も方向が定かでない。これについては“博士会”(日本で博士号を取得した若手研究者の会)が一貫して問題にしてきたことで、バーサンジャブとも交渉してきた。現在では学部単位の大学院決議機関がない。大学院委員会が全学レベルで設置されているだけで、研究科の自治がない。だから各研究科のカリキュラムも自主的に決められない。こうしたことは教育省の指導性で克服できることだ。バーサンジャブにとって、あるいは教育省にとって大学問題の解決原理は「アカデミックフリーダム」と「民営化」にあるので、教育省にとっては不関与が一番いいのかもしれない。これらは、教育省・大学・科学アカデミーの3者間を律する原理がまだ見出されていない、という問題かもしれない。

とはいえバーサンジャブのヒアリングでここ10年間の教育省の高等教育政策の概要がわかった。今回は時間がなかったが、再度ヒアリングを試みたい。

## 6 N・ベグツ (Nadmiin, BEGZ 国立教育研究所所長)

略歴 1952年生まれ。ザブハン県出身。1976年国立教育大学卒業(ロシア語科)。76-81年高等教育委員会職員。81-85年教育省国際局長。88-90年人民革命党党委員会勤務(教育政策担当)。90年国立教育研究所。現在国立教育研究所所長)

私は1976年に教育大のロシア語科を卒業した。そして高等教育委員会に就職し、1981年までは教科書の作成に関係していた。81-85年は教育省の国際局で局長をした。14カ国と関係し、5000人の留学生を派遣した。教員再教育を外国で実施し、日本にも送った。外国から教育関係の専門家300人を招聘した。88-90年は人民革命党の党委員会に勤務し教育政策担当だった。1990年、国立教育研究所に移った。

1990年以降の教育を振り返って見ると、90-96年が一番大変な時期で、特に92-96年はどん底だった。学校はなくなる、教師はやめる、ドロップアウトする生徒が続出する。教育と国家・経済・社会の発展とは切り離せない。97年くらいから経済が若干回復し始め、予算も持ち直し始めた。教育もどん底から脱出し始めた。エルデネスレンが2000年から上昇し始めた、というのは革命党からの視点であって、実際は97年くらいから上を向き始めた。2000年のADB文書(2000-05年教育長期計画)はモンゴル関係者の意見を結構集めて作っている。数字はモンゴル側から提出したものだ。

1990年以前の体制は、革命党中心の体制ではあったが、地方のニーズを集約しなかったわけではない。私の教育省時代の経験からいっても、教育省はソムの人民代表機関(役所、全国に320ソム)やアイマグの代表機関(県庁、全国に18)からニーズを掌握し、国家計画委員会、大臣委員会を通して人民委員会(国会、年2回開催)に反映した。大臣委員会と人民委員会とを媒介したのが革命党委員会だった。革命党の党委員会はトップの政治機関であった。とはいえソムの意見やデータを教育省が把握しないと行政はできなかった。

教育について見るならば、90年までは国の教育ニーズが支配的だった。たとえば大学への入学者や大卒就職者は国が管理し、個人のニーズは顧慮されなかった。だから失業はなかったが、個人の欲求は実現されなかった。90年から2005年の現在まではまったく逆に個人のニーズが前面に出た。市場経済が政策をつくるのであって、国は小さければ小さいほうがいい。国は政策立案者ではない。これが90年以降の考え方だった。とはいえ市場が実際の政策を作るかといえば、そうではない。モンゴルの市場・社会はそこまで成熟していない。むしろ政策形成能力をモンゴル社会はもっていない。もつとすればこれからだ。これからは社会のニーズが明らかにされる時代だ。また国の政策形成能力の重要性が2年位前からわかってきた。こうした趨勢と個人のニーズとを調整するのが今後の課題になっている。

90年以降の教育法の変遷についていうと、91年憲法制定以前に共和国教育法ができた。4・4・2の学校体系で、私立学校が導入された。フォーマル教育とノンフォーマル教育とに分けられて作られた。95年法で、教育基本法、初等中等教育法、高等教育法の3つに分けられた。5・3・2の学校体系だった。98年に法が改正され、4・4・2にもどった。2002年の教育法では4つに別れ、新たに職業教育法ができた。ここで初めて5・4・2学校体系が目指された。8歳児入学から7歳児入学になり、小学校が4年から5年制へと変わることになり、それが2005年9月から実施されることになった。教育関係法はこれだけで、ほかにはできていない。必要な法はあるが、それは今後の課題だ。現在は大臣裁定でカバーしている。

初等・中等教育のナショナル・スタンダードは98年にはじめてできた。名前もスタンダードになった。90-98年は「条件」とか「資格」といっており、まとまった文章はなかった。学年別、教科別に必要にあわせてつくられた。教科で言うと、98年に「自然学」「保健」「外国語」(英語・日本語)などが新設された。教科書は毎年変わった。98年スタンダードの特徴は「内容」のスタンダードであり、今回のように「内容」「指導法」「評価」などの区分がない。モンゴル

では教育と政治はかかわりやすい。たとえば社会科の教科書などでは、革命党のことをよく書いてあったり、悪く書いてあったりすると、「これを書きかえろ」といった介入が今でもある。

モンゴルの教育行政は分権化してきている。政策立案が国からアイマグに移りつつある。4年に一度各アイマグは「アイマグの教育政策」を作り公表する。これは4年に1度の選挙と連動している。また毎年学校から報告書が教育省情報局に集約される。これには局長報告と子どもの成績などの統計資料がついている。こうした資料を見ると分権化の実態が見えてくると思う。

#### (小出コメント)

ベグツさんとはモンゴルへ来る前から知己であった。彼は教育関係の日本の学会に出席し、サッポロにも来ている。昨年夏の日本教育学会札幌大会でも報告しており、その際わたしもサッポロに帰っていたのでお会いできた。しかし彼の専門分野である教育史の論文などについては私は見ていない。またベグツさんのモンゴルでの弟子であるウルツイさんが北大教育学研究科で博士号をとっており、そうした関係もありベグツさんとは懇意であった。

今回ベグツさんの履歴をかなり詳細に聞くことができた。モンゴル教育界の中枢を歩いてきた人であることがわかる。90年より以前は教育行政と革命党内部の世界を、90年以降は教育研究所で活躍してこられた。こうした経歴を見ても、90年という年がその前後を分かつ断絶した境界ではなく、むしろ接続したエポックであることがわかる。その点では東ドイツなんかとはまったく違う。

90年がどのような意味で接続し、どのような意味で明確な断絶を示しているかは今後のヒアリング全体を通して明らかにしたい。今のところ明らかなのは、90年の前後で人民革命党の内部で幹部の新旧交代がはっきりあり、旧体制派は去り、ロシアのペレストロイカを支持する層が党の中枢を握ったということだ。だから革命党は90年を過ぎて選挙の洗礼を受けても政権を担当できた。こうした大局的な変化が教育界ではどのように行われたかは、今後の課題だ。たとえば91年教育法にどのような痕跡を残しているか、などだ。

ベグツさんとの話で私自身モンゴル教育の変化を整理してみる視点をいくつか得ることができた。

第1は、90年以降の時期区分である。エルデネスレンと異なり、96年をエポックにしている。これは面白いが、その根拠を経済の回復期にあわせているようだ。経済と教育は関係はするが、直接的ではない。社会主義的思考では結びつける傾向はあったが、教育分野で96年以降にどのような独自のメルクマールがあるのかははっきりしない。しかしモンゴル教育史の専門家の提起であるだけに尊重してこんご検証してみたい。

第2は、90年以前のモンゴルの国家体制の一般的な特徴としてトップダウン型の政治行政システムをあげる人が多い。ベグツさんも基本的にはそれを支持しているようだが、地方からの政策上の発意があり、それを教育省は吸い上げていた、また吸い上げないと政策立案はできなかった、ということを経政機関に在職していた経験から明らかにしている。この視点は特に80年代のモンゴルを見るときには必要になる視点かもしれない。とはいえボトムアップ型の政策形成のパイプが教育行政機関の内部にはあったが、それ以外の党機関や大衆機関の中、特に政治的なプロセスでの機関ではどうだったかは不明である。

第3は、教育省がどのようなニーズに対応したのかについて触れた部分である。これは私と

の対話の中で整理されていった論点であるが、彼は、90年以前は国家のニーズの充足が中心であり、それ以降は国家のニーズは顧慮されなくて個人のニーズが中心になったことを強調した。これは面白い視点だし、一般的にも共有されている視点で、ほかのモンゴル人からも聞くことができた視点だった。国家のニーズの充足から個人のニーズの充足への転換が図られるようになったという図式である。“市場社会への転換”という移行の構図が提示してきた視点である。しかしさきのように国家から個人のニーズへの転換では社会のニーズが不明となる。私の2年間のモンゴル滞在の印象から言えば、モンゴル社会は自らのニーズを明示し組織化するだけにはまだ成熟していない、しかし明らかに社会のニーズ（人間社会の共同ニーズ）は成長しつつあるし、部分的には組織化されてもいる。こうしたニーズが社会レベルだけでなく、行政や政治のレベルで組織化されていないところにモンゴルの現在の悲劇がある、というのが私なりの仮説であった。ベグツさんにもこの仮説を提示した。ベグツさんはこの見解に賛成し、社会のニーズを組織するのはまさにこれからの課題であることを強調した。私からは、教育行政機関が政策立案能力を持てなかったのは、モンゴルのあたらしい国家は個人のニーズにこたえなければいけない、個人のニーズは市場で顕在化し、組織化され、実現できるはずだ、という仮説に支配されてきたからではないのか、という視点を提示した。いずれにしても、こうした議論にはベグツさんも大いに興味・関心を示し、今後の検証にゆだねることとした。

第4は、90年以降の教育法や教育課程のナショナル・スタンダードの変遷について教育史の専門家から聞くことができたので、90年以降の教育史の概要を把握できた。あとはこの変遷を具体的な資料や聞き取りで補充していけばいい。ベグツさんはこのプロセスをすでに本にしているので、それを参考にして私なりのアウトラインを作ることにしたい。

第5は、教育行政の分権化のプロセスを追うための行政資料のあてができたことだ。どうやらアイマグから教育省への報告書が定期的に出されているらしい。これを集めてその内容を整理することで、アイマグ別の行政執行の違いを見ることもできるし、違いを知ることにより分権化の進展具合を見ることもできるだろう。また教育改革の“芽”を地方レベルで発見することも可能になる。

いずれにしてもベグツさんとの共同研究の可能性が出てきたことはありがたい。

なお、ベグツさんとの話で私（小出）が気がついたことを付記すると、90年代は“無政府状態”で、政策形成の中心点がなかった、といえる。世銀などに見られた「市場に任せればすべてうまく行く」式の神話に踊らされた時代だった、といえそうだ。“国”が退き、市場経済社会が前面に出た。しかしそんなものはなく、“社会”も“個人”もほおっておかれた。どこにもセンターのない社会が現れた。その中で教育が実施された。だから改革というべき教育改革は90年代には現れなかった。2000年以降現れてきたが、それは社会主義時代のやり方を踏襲する傾向が強いもので、地方や社会からのボトムアップのルートはまだ形成されていない。これは仮説である。

## II 大学教員の証言

### 7 G・ガルサン（Serenengyun, GALSAN 言語学大学学長）

略歴 ゴビアルタイ県出身。1931年生まれ。47年国立大学付属師範学校入学（モンゴル語・歴史科）。49年ゴビアルタイ県教員。55年国立大学ロシア語・文学科入学。59年国立

大教員。61-64年モスクワ大学留学，PhD取得（言語学）。64年国立教育大学教員。66年モンゴル国立大教員。70-72年モスクワ大留学，サイエンス・ドクター取得。78年モスクワ大教員。79年モンゴル国立大付属ロシア語研究所所長。85年国立大教員職首。89年ワルシャワ大，90年北京大教員。90年以降は国立教育大・人文大副学長など歴任し，現在言語大学学長。

私は，1931年モンゴル西部のゴビ・アルタイ山地に生まれた。アルタイ山脈のハンタイシル山が見えるところだ。遊牧民の子どもで，母は13人の子どもがいた。私は上から2番目だ。その母も1990年2月の旧正月に87歳でなくなった。私はちょうどポーランドのワルシャワ大で働いていたので，母の死に会えなかった。

16歳でウランバートルの国立モンゴル大の付属師範学校のモンゴル語・歴史科に入った。師範学校では1947-49年の2年間勉強し，18歳でDiplomaを取得し，言語・歴史の教員となった。これは5-7学年の子どもを教える中等教員の資格だ。師範には言語・歴史，物理・算数，自然学・地理の3つのFacultyがあった。私が入学する前の1942年にモンゴル国立大学ができて，師範学校が付設された。これは3年制の小学校教員養成コースだった。しかしそれだけでは教員が不足するので，2年制の中等教員養成の師範を作り，こちらには優秀な生徒が集まった。私が入ったのはそちらで，そこでモンゴル語，文学，歴史，中世モンゴル史，近・現代史，言語学などを履修した。

18歳で卒業し，ゴビアルタイに戻り，教員をした。6年間教員をして，1955年にモンゴル国立大に入学した。当時農牧学部や医学部などあったが，私は歴史学部を希望したがだめで，「ロシア語・文学」学部に入った。そこで成績はすべて「A」で，優等生だった。ある日学長に呼ばれ，「お前はロシア語が優秀だから，モンゴル大のロシア語教師になれ」と言われ，週10時間教えることになった。3年生のときで，奨学金以外に1ヶ月700Tgの給料も手に入り，相当豊かだった。中学教師の給料が月600Tgの時代だった。

1959年「赤いディプロマ」（赤い表紙の卒業証書，最優等生の証書）をもらって卒業した。これは私だけしかもらわなかったし，それは大学教員になれる資格でもあった。しかし私は外務省に入りたかった。私の兄が外務省にいた。私は兄のようになりたかった。しかし兄に「今のままやれ」と言われて，私は大学教師になった。

1960年にソビエトでロシア語教師の会議が開かれ，モンゴルからも参加した。わたしはその第3回会議に参加し，「モンゴル語とロシア語の語彙の比較」というテーマで報告した。これがモスクワ大のブリッキナー教授から認められ，私の研究もここからスタートした。1961年にはモンゴルの全国大学統一試験のコンペがあり，数学や物理・生物・化学分野などを含め70人くらいが参加し，そのうち20人が選ばれソビエトに留学できた。私もその中に入った。しかし子どもがすでに3人いて，ロシアへ行くのは大変だった。妻の父が「行け」というので，私も行く決意をした。20人の留学生はモニタリング審査され，1人がいけなくなった。党员かどうかの問題とされた。私は党员でなかった。党员になるのは大変で，副ドクターをとれば党员になれたので，私は副ドクターの資格をとった。当時のソビエト留学奨学金は学生で60ルーブル，院生で90ルーブルだった。私は90ルーブルもらった。

1961-64年と3年間留学し，さらに1年かけて私はサイエンス・ドクターの候補生（カンディダート）の資格をとった。今のPhDに相当する。その時これをもらったのは19人中私だけだった。私のテーマは，モンゴル語とロシア語の語彙の比較研究で，こうした比較研究は私が初め

てだった。モンゴル人の意識でロシア語を読むと、新しいことを発見できるのだ。モンゴル学の分野で有名な日本人は、服部、小浜、田中がいるが、みな死んだ。生きている人では、小沢、橋本などだ。モンゴル学では日本が世界でも強い。1959年にモンゴルで第1回モンゴル国際学会を開き、第2回大会で私は発表した。それ以降ずっとモンゴルでこの国際学会を開いている。

1964年私はPhDを取得し、モンゴル教育大学教師になった。ここで研究室長や副学長をしたが、私はモンゴル国立大が好きだった。1966年に国立大に移った。1970年にモンゴルからロシアにドクターの院生を送ることになった。2年間モスクワ大の博士課程で研究できた。私も応募し、国立大より2人、科学アカデミーより3人(医学・薬学・地理学)選ばれ、私もそのひとりとなった。2年間と1ヶ月研究に従事し、1972年サイエンス・ドクターをとった。モンゴル人では第12番目のサイエンス・ドクターだった。

1978年にモスクワ大でモンゴル語を教えることになり、3年契約でモスクワに派遣された。「外国人にモンゴル語を教える教科書をロシア語で書く」という仕事だった。しかし、翌年の1979年にモンゴルのツエデンバル人民委員会議長(大統領)に呼ばれ、モンゴル・ロシア語研究所の設置準備をやれといわれモンゴルに戻った。そしてモンゴル国立大付属のロシア語研究所を作った。1979年私はソビエトでプーシキン・ゴールデンメダルを授与された。世界で10人が表彰されたが、アジアからはインドとモンゴルだけだった。ドイツのベルリンで表彰式が行われたが、私は行けなかった。ツエデンバルがテレビで私がこの賞を取ることを知って、私に先の研究所の所長になれといったのだ。そうしたわけで私はモスクワ大に戻れなくなり、モンゴルでロシア語研究所長になった。また同時に高等教育委員会の会長にもされた。この委員会は教育省よりも高い位置にあり、高等教育政策を決める委員会であった。ツエデンバルは私の10歳くらい年上だったが、私の親友だったし、指導者でもあった。立派な人だった。

ところが、1984年ツエデンバルは国の最高ポストから追われた。ロシアとモンゴルとの軋轢で首になった。彼はモスクワに召還され、病気を理由に党や国家のすべての要職から退くことを強要された。私はそのころドイツで開かれていた高等教育会議に出席しており、その帰りにモスクワにより、ツエデンバルに会った。彼は病気なんかではなかった。病気は作り事であった。彼は監禁されていた。彼は私にタテ文字で「政治的な話はするな」とメモを書いてよこした。私は彼に「何をしていますか」と聞いた。彼は「メモを書いている」という返事だった。後日モンゴルが市場経済社会に移った1990年、私はこの間の事情を新聞に発表した。ロシアの研究者も新聞に書き、ツエデンバルの汚名をそそいだ。その後ツエデンバルアカデミーが作られ、私が初代総裁になり、今はツエデンバルの息子が総裁をしている。

私はモンゴルに戻ったが、85年に研究所や高等教育委員会を首にされた。党の政治局からは「研究をやれ」といわれ、国立大の「教授学研究所」の所員に任命された。毎日掃除や外部の仕事させられた。給料も教授の給料ではなく、下げられた。国の給料委員会にアピールし、その結果教授扱いの給料を回復できた。

他方当時ゴルバチョフの論文などを私は読んでいた。彼は「行政の悪い点は人をいじめることだ」と書いていた。私はこれを利用して革命党にアピールした。86年には私の妻がガンで死んだ。私は治療を外国で受けさせたいといったが、3年待たされた。89年には私はワルシャワ大学に呼ばれ、2年契約でモンゴル語を教えることになったが、1年間でワルシャワ大はつぶれた。それから90年に北京大に移り、2年半いた。ベルリンの壁の崩壊を私はワルシャワで見た。

90年以降、モンゴルに戻り、教育大で研究室を担当し、ついで国立人文大で副学長をした。私の友人で日本で勉強したチョイロブサンドルがウランバートルに私大を作り、私にも私大を作れといった。それで私は言語大学を作った。また官製の科学アカデミーに抗して私大と国立大（モンゴル国立大は除く）を中心に「総合科学アカデミー」を作り、この国の高等教育や学術行政への提言をしている。

（小出コメント）

昨年6月、北大生涯学習研究部の野口部長、町井・木村教授、国立学校財務センターの丸山教授らがチームを組んでモンゴルの大学調査にこられた。これは町井教授を長とする科学研究補助金によるもので、私もそのメンバーであった。もとはといえば、私のカウンターパートである教育省副大臣のエルデネスレンよりモンゴルの大学再編成プランについて意見を求められており、この調査はそのためにもなった。その際国・私立の20数大学を調査し、ガルサン学長の言語大学もそのひとつに入っており、わたしはそのとき初めて彼にお会いした。

言語学は私の専門外であるが、ガルサン教授の学識の深さについてはお会いしてすぐわかった。モンゴル随一の学者の一人だ。同時にその経歴からわかるように高等教育行政の最高ポストにいた人でもある。にもかかわらず、85年のツエデンバル追放に連座して大学から追われた。その後はワルシャワ、北京の大学を歴任し、90年以後にモンゴルに戻り自ら大学を創設し、いくつかの大学を糾合して“総合科学アカデミー”という民間のアソシエーションを作り、高等教育行政に対する影響力を確保している。これはなかなかできないことだ。

学長室では終日文献資料を相手に研究を深め、今では「元朝秘史」のオリジンを渉獵した結果、「秘史」のモンゴル語原文はなく、あれはもともと漢文で書かれたものだ、というのが彼の仮説となっている。彼は70歳を優に越しているが、体力強化にたえず努めており、今でも大型ランドクルーザーを駆使してモンゴルの草原を走っている。

上記の大学調査でお会いして以降、ガルサン教授は私のオフィスを尋ねてこられたことがある。「総合科学アカデミー」の交流機関を日本に求めたい、というのが趣旨であった。私はモンゴルの官製「科学アカデミー」とJSPS（日本学術振興会）との学術交流については努めてきたが、民間レベルの学術交流については考えなかった。結局総合科学アカデミーがどんな可能性があるかを知った上で交流の対象機関を探すということにして、このテーマについては後日追求することにした。

ガルサン教授がモンゴルの大学関係機関から追放されたのは1985年だった。それ以前に彼は東西ドイツを含めてよくヨーロッパに足を伸ばしていた。私が東ドイツのライプチヒに1年弱滞在したのは1983年だった。したがって同時期にわれわれは東欧にいたことになる。そんな話をガルサン教授と1時間ほど交わした。もう20年以上前の話だ。

モンゴルのエリートたちは東ドイツの留学経験を持つ。エリートといっても90年以前ではこの国の知識人は“知識人階級”と言われ、モンゴル社会ではもっとも信用されない階級だった。“知識人”は信用できない人間の代名詞であり、労働者・農民階級の下に置かれた階級で、自分の履歴書には“知識人階級”ないし“知識人階級出身”と記さなければならなかった。政治的迫害にもっとも遭遇した階層だった。一夜にしてその社会的地位がひっくり返る経験を彼らは多くもつ。そんな話は日常茶飯に聞くことができる。ガルサン教授もそうした知識人の一人だ。しかし彼にはそのような影はない。人民革命党の黨員であったにもかかわらず、彼はツエデン

バルの汚名の挽回に 90 年の政変後直ちに立ち上がった。生粋の自由人である風貌を彼は持っている。

1990 年過ぎに彼は再び国立大学のひとつである人文大学の副学長になるが、96 年には言語学大学を創設し学長になる。自らの専門であるモンゴル語とロシア語及び言語学を生かした大学作りであるが、当初は教員の養成、とくに地方の教員養成を主たる目的とした。彼はアメリカモデルの言語学を嫌い、独自の外国語教育を重視している。多様な外国語を比較し、古い言語を重視する。言語学の研究会を私大中心に作り、毎年研究例会を自ら開いている。また古くからのモンゴル学会の中心人物で、国際学会を毎年モンゴルで開き、東京大学や大阪大学との研究交流を重ねてきた。昨年大学院の修士課程を設置し、若手の研究者養成に乗り出した。最近「元朝秘史」のモンゴル語の原典はなかったという仮説を提起し、波紋を呼んでいる。

いずれにしてもモンゴル人がこの硬骨漢の老研究者から引き継ぐべきものは多い。

## 8 U・ドヨド (Uvsh DOYOD モンゴル国立大学名誉教授)

**略歴** ドルノゴビ県出身。1929 年生まれ。1951 年モ国立大物理・数学学部入学。55 年ウブスハンガイ県中学教員。56 年師範大学教員(数学)。62 年モ国立大教員。82 年国立大に指導法研究室を設置し、91 年には科学教育センターとして正規に認められる。現在モンゴル国立大数学教育担当教授(名誉教授)。

私は 1929 年ドルノゴビ県の南端ハタンブラグ・ソムのグンというところで遊牧民の子として生まれた。母は内モンゴルの人、父は中国との国境に近いドルノゴビの出身だ。家畜は 5 家畜すべていた。らくだ 20, 馬 10, 牛 20, あとはヤギと羊で全部で 3-400 頭いた。これだと貧乏なほうだった。平均の遊牧民は 500 頭以上飼っていた。兄弟は 3 人だったが、下の弟と妹はほかの家で育てられた。父は木工ができ、ドアや柱など注文に応じて作っていた。母は完全な遊牧民だった。

10 歳でハタンブラグの学校に入った。学校といってもゲルであって、生徒は男 10 人、女 10 人で一人の教師と一緒にそこに住んだ。学校を「人民教育教室」と呼んだ。春から秋にかけて 6 ヶ月だけの学校だった。授業は算数とタテ文字のモンゴル語の授業だけだった。入学後 1 年たって、小学校の校舎ができた。4 年生まで 50 人くらいいた。寮はゲルだった。

わたしの家の近くには 19 世紀のモンゴルの高僧ダンザンラブジャ(1803-56)がいた。ダンザンラブジャは単なる僧侶ではなかった。仏画を描き、仏像を彫る芸術家であり、東洋哲学者であり、鉱物資源を探索し岩絵の具を作る科学者でもあり、薬剤師でもあった。私の父は、チベット語やインド語を知っており、私は父から彼のことを聞いた。近所の遊牧民もダンザンラブジャのことを知っており、わたしは彼らからこのモンゴルが生んだ知識人のことをきいた。しかし、学校では一切このことを教えなかった。こうした知識人は革命前にモンゴルにはおおぜいいた。教育や文化も盛んであった。しかし革命後の教育ではそうしたことは引き継がれなかった。モンゴルの教育を知るにはこうした革命前のことが発掘されないといけないと思う。

またスターリンによる圧制前の 1930 年代は面白い時期だったと思う。学校の教科書の執筆者は当時の知識人で、革命前のことを知っていた。だからいい教科書を書いた。たとえばナツギドルジなどはドイツ・日本・フランスに留学しており、30 年代のいい教科書を作った。音楽の分野でも日本で専門教育を受けた人が多く、日本の歌が入ってきた。鉄道唱歌などはその例だ。モンゴルの 5 つの音階は日本の歌の音階と似ている。モンゴルの民謡と日本の民謡が似ている

のもこうした背景がある。

中学はドルノゴビのアイマグセンター・サインシャンドの10年制学校に入った。その第1期生だった。51年にモンゴル国立大の物理・数学学部に入った。当時高卒後直接大学に入るコースがあり、これに私と友人二人が入った。あとの人は大学体験コース（注：日本の旧制予科のようなもの）にはいり、そこで1年やり大学に入った。1955年に大学を卒業し、ウブルハンガイのアイマグセンターで中学の数学教師になった。10年生を担当した。生徒は9人だけで、1年間勤務し、その後教育省に呼ばれ、教員再訓練研究所の専門家になれといわれ、移った。56年には師範大学に移り、そこで7年間物理・数学を教えた。62年に国立大に移り、数学教師となった。33歳のときだった。

1965年ころから私は数学教育に関心を持ち始めた。私の10年制学校時代は、メソドロジーの専門家はいなかったが、授業は面白かった。60年代に入りメソドロジーの研究が始まったが、それと同時に授業は面白くなくなった。私の関心は授業の方法論だけでなく、心理学にも及んだ。哲学にも関心をもった。人間はどんな風に学習をするのか。知識はいかに形成されるのか。人間の創造的な知識はどのように作られるか。1945年ころ、日本は食べるものがなかった。モンゴルにはあった。それが今では日本とモンゴルは大きな違いができています。日本では知識を生産し発達した。モンゴルはリソースはあるのに貧困だ。これは知識の生産に違いがあるからだ。人間はどうやって知識を作るのか。こうしたことが私の関心事となった。

1978年に私はロシアと行き来して、指導法の研究を深めた。私はモスクワ大で3人の著名な指導法心理学者の下で研究した。カリフェールン、タリズナー、エレシトワなどだった。1982年に、モスクワ大で心理学を研究してきた化学のネルグイと一緒に、物理・化学・国語教育に関心を持っている人を集めてモンゴル国立大にボランティアで指導法研究室を作った。それが科学教育センター（Science Education Center）に発展した。1990年までに数学のシャグドルやグライジャムツ、化学のオユンツエツエグ、ダルジャー、物理のブルマー、ガンバットなどが参加してきた。91年にこれが正規の大学の機関になり、そして現在、学長からは教授学を中心とする独立学部にしたらどうかという話が出されている。

科学教育センターの指導法は東洋哲学に依拠している。世界は常に変化している、という考えと、世界は常に二つの要素の相互依存によってなっているという考えだ。それを図示するとこんな風になる（略すが、ひとつの円の中に二つの魚が同居している図だ。モンゴルの国章の中にこの絵図がある）。学校の世界で言えば、それは教員と子どもであり、一方は教え、他方は学ぶ。従来モンゴルの教育では、このうちの一方だけ、つまり教員の側だけが強調され、子どもの側は無視されてきた。それでは教育ではない。一方に教員の教授活動があり、他方に生徒の学習活動がある。この両者の関連を見なければ教育は成立しない。教員はマネジャーであり、5つの原則に支配される。5つの原則とは、グループを作り、企画し、指導し、組織し、評価する、という原則だ。こうしたことを自覚しないといけない。ざっとこんなことを主張してきた。

1990年前後の国立大はほとんど変化がなかった。不思議なくらいだ。大学の管理行政では変化はあったが、教育の方法などではほとんど変化はなかった。大学のスタンダードも変わらなかった。これを今変えないといけない。90年前、大学は教育機関と位置づけられ、研究はしなくてよかった。しかしモンゴル国立大の場合は教育と研究の両方を重視してきた。ほかの大学は教育を重視し、研究は弱かった。科学アカデミーは研究だけやればよかった。それは住民か

ら離れた存在だった。現在の大学は、教育をよくするためのテクノロジーを本格的に重視しないといけない。

(小出コメント)

ドヨド教授は、私が2003年3月モンゴルへ初めて渡ったとき、最初に面識を得た大学教員だ。3月教育省でセミナーを開き私が日本とモンゴルの教育改革（カリキュラム改革）について話したが、セミナー終了後モンゴル国立大のブルマー教授（物理）に私は呼び止められた。ぜひ国立大の科学教育センターに来てほしい、というのだ。翌日私はこのセンターを訪問し、ドヨド教授にお会いした。

彼は、70歳を越えた落ちついたもの静かな紳士だった。その話し方も同じで、ひとつひとつ言葉をかみしめて話す人だった。驚いたことは、彼がメモを書くとき、モンゴル古来の立て文字を使っていたことだ。彼は数学者である。何につけ横文字が似合う。しかし、わたしには判読不能のタテ文字をすらすら書いていた。私はこの人にモンゴルの歴史の厚さを感じた。それは上述のヒアリングの中身、とくにモンゴルの高僧ダンザンラブジャのくだりをみてもわかることだ。彼はモンゴルを愛している。

なお付言すれば、私（小出）は2003年秋にこの高僧が開いたという寺に行ったことがある。荒地の砂漠のど真ん中にその寺はあった。周りは溶岩台地で、そこでダンザンラブジャは修業した。1930年代、スターリンの宗教弾圧下にあっては、彼の子孫がその遺品を地下に隠して略奪を免れたが、寺は破壊された。1990年以降地下から遺品が再掘され、寺も再建された。1昨年彼の死後100年記念の国際行事が日本の援助によりこの地で開かれた。

ドヨド教授は数学（幾何、解析）の専門家だ。1962年モンゴル国立大の教師になって以降多くの弟子を育ててきた。モンゴルでは一番優秀な子どもが数学を専攻する。そのうち半分が数学を生かした道に進出し、半分は政治家や行政官など社会の中枢機関に進出する。だから政治・行政分野でのドヨド教授の弟子は多い。私は何人にも会っている。また教育大の教員や高校の校長・教頭などにもその弟子は多い。彼は90年前後のモンゴル史の中で多くのエリートを育ててきた。

数学者である彼が、数学教育のみならず教育一般、特に学習過程に興味を持ち始めたのが1965年だったことがヒアリングでわかる。だから数学者として国立大に教職を得て数年足らずで教授・学習過程に興味を持ったことになる。これはモンゴルでは稀有のことだ。教育学者でない彼が教授学や学習心理学に関心をもち実証的に研究をしてきたことも注目していい。この国ではそれ自体が稀なことだ。数学教育は“エリート”の学問だから、できる学生を対象にする。できない学生はほおっておく。社会主義社会の一般的な学校教育の現実はそうだった。少なくともモンゴルではそうだった。にもかかわらずドヨド教授は数学の指導・学習過程に注目した。

私はモンゴルにきてすぐ地方の学校訪問をはじめた。そこでわかったことは、この国では指導法の研究は成立しなかった、ということだ。実験・実習なんかを通じて、仮説を立て、実証し、結論を探し出すというプロセスはなくてよかったのだ。だからこそ私は実験・実習を重視した授業作りを先の教育省でのセミナーで強調した。偶然にもそれがブルマー教授を通じて国立大の科学教育センターと結びついた。センターにはドヨド教授がいた。指導法の重要性を強調する点でわれわれは一致した。今まで私はこの偶然の一致はたまたまのものだと考えてきた。

しかしこの私の考えは偏見だったことがドヨド教授と会うたびに明らかにされてきた。指導法を重視する歴史ないし拠点がこの国にあったのだ、ということを私は知らされた。今回のヒアリングではこのことが一層はっきりした。

しかし同時にわかったことは、こうした指導法重視の研究者は少なく、このセンターに集中していた、ということだ。ことしナショナルスタンダードの改定が行われたが、初めて指導法重視の原理が導入された。そうした動きの中心にこのドヨドグループがいたのである。教育学の研究者からはこうした芽は出なかった。

ドヨド・グループの中心にはもう一人の研究者がいる。それは国立大の化学出身のネルグイさんだ(証言4参照)。国立大で教職につき、科学教育センターの創設メンバーだった人だ。いまは国立大をやめ、教育省で教員再教育担当専門家として活躍している。彼女は東ドイツで数年間本格的に科学教育の指導法を研究してきている。去年はフランスに10ヶ月遊学した。ネルグイさんとは別途ヒアリングを予定しているので、そのときさらにいろいろわかると思う。ネルグイさん以外にもこのセンターには優秀な人が集まっているので、そうした人を含めたヒアリングを今後予定する。科学教育センターと理科実験開発センターの今後の発展を願いたい。このセンターを核にして指導法を中心とする学部が独立する話が学長から提起されている。これもその実現を願いたい。

## 9 B・ブルマー (Banzragch, BURMAA モンゴル国立大学・物理学)

略歴 ザブハン県出身。1940年生まれ。1958年モンゴル国立大学入学(物理)。62年国立大教員。73-78年東ドイツ・フンボルト大学院留学(物理)。79年モンゴル国立大学教員。

私は1940年ザブハン・アイマグセンターのウリアスタイに生まれた。私を取り上げた産婆さんがロシア人で、私は「アリザ」というロシア名をもらった。「リサ」というのは狐の意味で、大学に入るまでずっとこの名前でもばれていた。大学に入るときこれはロシア名だからモンゴル名に変えろと言われて、ブルマーに変えた。

父は教師で、アイマグの小学校の校長や教育局長などしていた。そのあとウランバートルに派遣され、人民革命党の書記次長の秘書をした。しかし1938年この書記次長は逮捕され粛清された。私の父はザブハンに帰ってきたが、1940年7月に逮捕された。同時に家族の財産は靴や服、ピアスまで取り上げられ、無一文になってしまった。父や母は遊牧民でもあり、相当の家畜を持っていたが、これも取り上げられた。近所の人たちは私たち家族から離れてしまった。父は5-6年間行方不明になり、連絡は取れなかったが、ある日知り合いの人が来て、私たちと会い、帰っていった。この人がウランバートルにいた父に会い、私たちのことを父に伝えた、とあとで知った。

私の家族は4人だった。子どもは二人で姉がいた。父は5-6年間行方不明だったが、その後ウランバートルの刑務所にいることがわかった。その間父は無罪を主張し続けた。7年間刑務所に入れられ、病人となってでてきた。治療をしたが、1958年48歳で死んだ。1955年にフルシチョフのスターリン批判があり、ウランバートルの革命党の人がやってきて、父に謝罪し、党員証明書を出してくれた。父は「親日派」として疑われたのだ。ウランバートルでは疑われるとその家族までが抑圧された。知識人は当時よく嫌疑をかけられ、抑圧されたものだ。1990年になって、なんでも言えるようになった。財産の没取りリストが社会保障省より届けられ、父

が出していた無罪アピールの手紙も返ってきた。

母は幼稚園の園長をしていた。ウリアスタイにある有名な幼稚園だった。1948年私は小学校に入った。1956年の中学生のころ教師によばれて、ロシアで毎年やっていた国際ピオニールの大会に行けと言われた。大会はドイツで行われた。私はトラックに乗せられ、ウランバートルに行き、そこで5-6人が一緒になり、ベルリンに送られた。ベルリンの隣にあるピオニール村に1ヶ月いた。ザブハンからドイツに行ったのは私が初めてだったという。

私は10年制学校を卒業し、1958年にモンゴル国立大に入った。学科は物理だった。なぜ物理だったか。当時地方では職業といえば医者と教師しかなかった。私は10年制学校の物理か数学の教師になりたかった。クラスメートは60人いたが、みな優秀だった。ことしこのメンバーの同窓会をしたが、このうち10人以上が国立大や科学アカデミーで働いている。そのほとんどが自然科学の分野だ。私以外の女性は6人いたが、みな医者をやっている。私は父の影響があり、政治の世界からは離れてきた。しかし大学では学生委員会の活動や社会的活動に積極的に参加した。1961年、大学2年のとき、バクダットで開かれた第6回世界学生会議にも参加した。これには日本も含め世界各国から代表が来ていた。

1962年に大学を卒業した。それまで大学の教師の多くはロシアから来ていたが、その多くがこのころになり帰国した。空き定員ができたので、私は教師に採用された。大学院はなかった。わたしは物理教員の資格を持っていたのでそれで教師になれた。当時は学生数も増え、気象学コースが新設され、私はそこの物理を担当した。多くの本を読み、研究もした。教師になり8年たち大学院が出来、私も入った。1971年私の夫が東ドイツのモンゴル大使館に派遣されたので、私もついて行き、ベルリンのフンボルト大学の大学院に入った。モンゴルからは初めてで、1973-77年のあいだエレクトロニクスの分野でセミコンダクターの研究に従事した。1978年モンゴルに帰り、78-90年国立大に勤務した。

1990年、ロシアでペレストロイカがおきた。モンゴル国立大では教員養成について真剣に検討が始まった。90年まではロシアから実験器具などの援助もあった。しかしそれがなくなり実験が出来なくなり、私は教育の分野に移った。90年から2000年まで国立大の学長委員会のセクレタリーもやった。特にドイツとの交流を企画し、副学長をドイツへ送ったりした。外国のドナー機関による各種のプロジェクトの実施も手がけた。90年を過ぎてからは社会主義国との交流がなくなった。93年に「モンゴルにおける大学改革」をテーマに5日間ウランバートルで国際会議を開いた。政府が間に入り、私がドイツと協力し、この会議を企画した。しかし90年以前のドイツの知り合いとの連絡は途絶えた。

94年にフンボルト大への旧留学生が招待されたとき、東ドイツ時代の実験器具がいらなくなり、私がそれを貰い受けた。そのころドイツの新しい大使から質問されたことがあった。1990年はドイツ人には一大ショックであったが、モンゴル人にはショックはなかったようだ。それはなぜか、と。私は答えた、「東ドイツ人はほんとに社会主義を創造したかった、しかしモンゴルでは社会主義は仮のもので、本気で社会主義を作ろうと思ってはいなかった、マルクスの真似をしていたのだ」と。

1990年を境にして東ドイツでは教員はほとんど代わった。モンゴルの大学では変化はなかった。政治家は代わった。しかしそれ以外の機関は代わらなかった。人民革命党の政治局員はすべて辞職して、若い世代と交代した。革命党の年輩者は彼らの子どもの多くが市場経済を起そうとしていたので、それに反対しなかった。また若者に反対しなかったのは、発言の自由が

制限されていたからでもある。大人は若い世代の動きに反対できなかったのだ。

大学内部の革命党の会議でも政治の話はしなかった。研究や教育のはなしばかりしていた。会議は静かだったし、大学内も静かだった。モンゴルでは私が大学をくびにされると、代わりの人がいなかった。ドイツの大学の人からは「あなたはまだ大学の先生をしているのか」とよくいわれた。私はスフバートル広場へは行かなかった。父の影響があった。90年の動きは政治の分野で現れたことであり、教育や研究の分野で変化は現れなかった。「人民革命党の歴史」を教えていた人がやめたくらいだ。私自身も変わらなかったし、以前からやっていたことをそのまま続けた。

学生の動きが活発になり反政府運動が始まったのは1989年で、あっという間に人々が集まってきた。その中にはロシアの大学院で学んだ学生が多かった。彼らは反対もされずに、運動を広げた。われわれはそれを見ていただけだ。やらせてみよう、どうなるか。抑圧はしなかった。自由な発言を出来なかったのは知識人に多かった。外国に行っていた人が批判的だった。

社会主義の時代は、優秀な人がのびることが出来た。貧乏でも大学へ行けた。私は父が逮捕され貧乏だったが、いい教育を受けることは出来た。父の逮捕はロシアの影響だった。逮捕時もロシア人がついてきた。当時の革命党のモンゴル人は熱心だったし、がんばった。国を支えようとした人が多かった。モンゴルは貧乏だったといわれるが本当は貧乏ではなかった。80年代の国民の多くは満足していたと思う。今は経済問題が大問題で、貧富が拡大している。貧乏だと大学へ行くことは出来ない。

いまは、外国で研究してきた研究者が大変だ。モンゴルには外国と同じ研究条件・環境がない。実現できないことをやろうとして、それで不満を持つ人が多い。もっと自分たちで出来ることは何かを考えることがだいじだ。モンゴルの研究者は外国からあおられている。この国にある研究テーマを見つけ、それに関係した分野で研究しないといけないと思う。

#### (小出コメント)

ブルマーさんのヒアリングを終えて、私は二つの感慨にとらわれた。ひとつは彼女の父親の生涯について、もうひとつは“1990年”が彼女にとって持つ意味についてだ。

彼女の父親は、1930年代とくに37-39年のモンゴルの“暗い時代”“大粛清”時代の犠牲者だった。粛清の対象は、ラマ教僧院、モンゴル東部のブリアート族、日本の満州派兵に協力的とされた“親日派”、革命党内及び軍部の独立派など広範な層に及んだ。かれらはスターリン及びスターリンに与するチョイバルサンによって粛清された。ブルマーさんの父親もこうした動きのさ中で逮捕され(1940)、投獄された。彼は獄中から無実を主張し続け、7年後病気で保釈されたが、その無実が晴らされたのはフルシチョフによるスターリン批判直後の55年においてであり、自らの死の3年前だった。こうした時期に彼女は生まれ、幼少期から大学に入るまでをすごした。この事実が彼女に与えた影響は測り知れない。彼女は政治の世界から身を離し、研究と教育の世界に大きな貢献をしてきた。私と同世代のモンゴル人の中にはこうした経験を持つ人が多い。彼らはもちろん人民革命党に対して批判を持つが敵対的ではない。ソビエトロシアによるモンゴル支配と、モンゴルにおける人民革命党が果たしてきた役割とを分けてみるだけの冷静さをもっている。そのことがブルマーさんの供述からわかる。

感慨の第2は、“1990年”がブルマーさんにとって持つ意味についてだ。私はながいことモンゴルの1990年をベルリンの壁の崩壊とその後の東ドイツ社会の変化と重ねてみてきた。しか

し、両者には違いがある。とくに大学人や公務員がこうむった影響でいうと、両国の違いは明らかだ。モンゴル人はほとんどショックを受けていない。極端に言えば、モンゴル人は1990年の変化を、日常的な経験の一コマとして受け入れている。大して大きな影響を与えていないのである。90年の前とあとには断絶がない。ほとんどそこには各自やってきた仕事の継続がある。90年以降の仕事の内容は90年以前の仕事の発展ですらある。90年の変化をまことに素直に受け入れている。自分が所属している組織について90年以前の責任を追及するということはない。組織の人はかわらないまま、今までやってきたことをそのまま継続する、という推移であった。ブルマーさんの話はそのひとつの典型だ。

東ドイツとの違いでもうひとつ面白いと思ったことがある。ブルマーさんはドイツ人に質問されてこう答えた。「モンゴルでは社会主義は仮のもので、本気で社会主義をつくろうとは思っていなかった。マルクスの真似をしていたのだ」と。この発言にはおどろいた。モンゴルの教育改革や大学改革に90年以前から誠実に取り組んできた大学人から、それも80年前後に東ベルリンの大学で数年間研究生活をしてきた人から、このような返事が出てくるものとは思わなかった。しかしよく考えてみるとそうかもしれない。フン族の頃からの長い歴史を持つモンゴルにとって、たかだか60年の社会主義の経験はなきに等しい。本気で社会主義の建設に身を挺した人はごく少数だったかもしれない。彼女の発言はモンゴルの社会のトップクラスの人たちとの接触が多かった人の話だけに説得力がある。マルクスやレーニンのことであれば彼女より私のほうが知っている。ウランバートルホテルの前に今でも立っているレーニン像は私のほうが身近に感ずるのではないだろうか。

もちろん1990年がブルマーさんにとって何も意味がなかったわけではない。「何でも言えるようになった」というのは大きい。父親が獄中から出した無実をアピールした手紙が戻ってきたこと、家の財産の没収リストが返ってきたことなどは、明らかな変化だ。また経済が悪化し、貧富の差が拡大し、経済的弱者の教育機会が悪化していることなどの指摘は別の意味で大きな変化だ。

彼女が最後に言ったことは重要だ。大学の教育・研究に責任を持つものとして重要なことを語っている。私は、日本の大学で博士号をとりモンゴルに帰り大学に勤務している若手研究者を何人か知っている。北海道大学農学研究科で博士号をとりモンゴル農牧業大学の女性教師ウングルマさんは私に言った。「私は北大でバイオサイエンスに関するテーマで学位をとった。しかしモンゴルに帰ってきて同じテーマで継続研究をすることは出来なかった。実験設備がないからだ。結局テーマを変えざるを得なくなった。今はモンゴルの植生問題、ひいては環境問題をテーマとしている」と。彼女は現在東京大学農学研究科と共同研究をしている。昨年ウランバートルで東大との共同国際シンポジウムを開き成功させている。彼女は国際的な先端分野で博士号をとった。しかしそれを継続できなかった。モンゴルに帰り「この国にある研究テーマを見つけ、そこで研究した」結果、違うレベルでの国際共同研究を今展開している。こうした若手研究者は増えている。モンゴルの研究者の一部は外国で研究し、成果を挙げ、外国にいく。別のグループはモンゴルの世界から普遍的なテーマを見出し、モンゴルにいながらその分野で国際的な活動をしている。ブルマーさんはこの後者の意味での新しい研究者が出てくることを期待している。これはきわめて重要なことだ。

## 10 U・アデイヤ (Umdal, ADIYA ホンゴル大学学長)

略歴 バヤンホンゴル県出身。1944年生まれ。63年モ国立大付属経済大学入学。69年国立農業大学教員（農業経済）。76-79年ロシア・アルマータ大学院留学，PhD取得。80年農業大教員，学部長歴任。87-89年農牧業省付属牧業研究所長（ドルノゴビ）。89年農業大学経済学部長。2000年農業大学教授。00年私立ホンゴル大学長。02年私立大学協会事務局長。現在ホンゴル大学学長。

私は1944年バヤンホンゴル北部のザグに生まれた。ハンガイ山脈のふもとの遊牧民ユムデルの子だ。家畜をいっぱい飼っていたが、1944年のゾド（雪害）ですべてを失った。それからは貧困だった。兄弟は4人，3人が姉で，私だけが男だった。父はホンゴルで羊を買い入れ，フブスグルに行って売った。放牧技術は優れていた。父は私が生まれたとき喜んだ。この子を幸せにするとしたが，私が2歳のとき羊の輸送中に亡くなった。羊の輸送は国の仕事で期間内に送らないといけない。体を悪くした父は輸送に参加できず，ゲルに残り一人で死んだ。父の収入は1ヶ月17 Tgだったが，それもなくなり，極貧状態に落ちた。家族は別の遊牧民の手伝いをして生活した。

私は小学校入学までは姉さんたちと遊牧をした。遊牧が好きだった。5歳でナーグムの馬に乗り，4位になった。5位までは優秀とされ，賞品をもらった。アメなどをいっぱいもらい，うれしかった。それから5年間同じ馬に乗りいつも2位になった。私は馬が好きだった。賞品に砂糖・発酵茶・モンゴル衣装などをもらった。小学校に入るまでは朝早く草原に出て，夕方暗くなってから帰った。その間アーロール（干しチーズ）だけを食べた。夜だけゲルで食事をとった。

1952年8歳でソムの学校に入った。かばんは布で縫ってもらった。私は優秀で，冬にはノート8冊，鉛筆4本もらった。これがもっとも印象に残っている。私は小さかったので1年生のときは母が心配して寮と一緒に生活した。2年になりひとりで下宿した。3年になりゴビアルタイのタイシル・ソムの4年制学校に移った。姉と一緒にだった。当時はゴビアルタイとザブハンと同じアイマグで，タイシルには運転手がおおぜいいた。運転手は文化の伝達者で，いろいろな情報を伝える人だった。

姉の夫も運転手だった。私は赤ん坊の世話から，家事までやり，木を切り，水を運んだ。しかしみな下手だったのでよく姉に怒られた。小学校時代は勉強よりも家の手伝いばかりしていた。5年生になりアイマグセンターの学校に移った。サッカーやバレーが好きだった。友達もおおぜいいた。勉強もよかった。友達の中には後に日本大使になったドルジンスレンもいた。彼は大使を5年間やり今は外務省の大臣顧問だ。

この学校はいい学校だった。自己学習を重視した。毎週オリンピックをやり優秀生徒を公表した。功勞教員がこの学校からおおぜい出た。これは大統領が出す教育界最高のメダルでゴビアルタイでも10人くらいしかいない。私やドルジンスレンは医者になろうと思っていた。しかし二人の女生徒が医者になり，私は経済，彼は英語コースを選ばされた。トップの生徒は医者になるのが普通だったが，私の担任教師はそう考えなかった。私と彼はトップだったが，教師は医者になることを許さなかった。「男はどんな仕事でもいい」という考えだった。私とその親友とは抗議して学校をサボった。しかし校長が来てあやまったので学校にもどった。当時生徒はなんになりたいかわからず，教師が決めていた。

1963年私は大学に入った。当時モンゴル国立大から経済学部が分かれて今の科学技術大学の

ところに経済大学ができた。私はそこへ入った。いろんな分野の経済を教えていた。“エンジニア経済”などというのもあった。自動車修理をしたり、夜中でも出かけないといけなかった。私は母に言われて「私は夜中にどこにでも行かない経済がいい」といったら、農業経済をやらされた。当時は入学の前に2ヶ月間農業実習に出された。私は乾草作りに回され、47もの乾草の山を作り、670 Tgもらった。その次の月には野菜作りをした。70 Tgもらった。こうしたことは小さいときから上手だった。もらったお金は大金だった。今の金では100倍くらいの値打ちがあり、1000ドル以上だと思う。私は遊牧民の子どもだから野菜は食べなかったし、食べることも出来なかった。

農業実習のあと私は病気になり、1年間休学した。ゴビアルタイの小学校の教師をした。これがその後の教員をやる基礎となった。大学にもどり3年半勉強した。優秀な生徒だった。学生委員会にも参加した。これはスポーツ・芸術・経験交流などを企画実行し、学長とも交渉した。人民革命党の党大学からも講師を呼びいろいろなテーマで話し合った。またこの委員会は自己学習の場でもあり、政治・経済・社会・哲学などについて学習した。私は4年間学生寮に入り、毎日図書館にいた。読書や論文を書くのが好きで、ほかの学生のアドバイザーになっていた。試験前になると私のノートはほかの学生にとられてしまった。学生はみな私の言うことを聞いた。3年の終わりに学長より学生45人連れてウムヌゴビへ行き井戸掘りを命ぜられた。私とそのリーダーとなった。

1967年4年生のとき、政府は農業経済の人材養成を3年間とする、という命令を出した。当時農業経済の学生は20人だけで少なかった。50人を補充し、農牧業大学で勉強することになり、私は農牧業大学に編入した。しかし農牧大には農業経済の教師はいなかったので経済大より4人の教師が移った。2ヶ月大学で学習し、6ヶ月地方(バヤンホンゴル、エルデネットザクト)で実習するという生活だった。私は優秀だったので、ネグデルの会計担当を知事から命ぜられた。そこで大学の学習と現場とはまったく違うことを知り、苦労した。大学の教科書はほとんどがロシアのもので、モンゴルに適したものではなかった。実習しながらの勉強で、睡眠は3時間くらいしか取れなかった。1ヶ月475 Tgもらった。この6ヶ月の実習で力がついた。毎日論文を書き、70ページくらいになった。これはほめられた。そして“赤いテイブローマ”をもらった。

1968年卒業し、農大の教員になれといわれた。当時は大学の命令だけでは教員になれなかった。革命党員でないとなれなかった。そこである教師に連れられて党指導部に行った。質問されたことは大学に入る前に1年間の社会体験をしたかどうか、ということだった。私はなかったので、1年間の社会体験をやらされた。バヤンホンゴルで農業の“経済専門家”として農業関係の企業に勤めた。給料が出たので母と姉と一緒に住んだ。ソムの住民委員会の委員もやった。1年たっても企業は私を手ばなそうとしなかった。大学から4回ほど帰れといってきた、やっともどることができた。

1969年8月、私は農大の教員になった。4年間農業経済の研究室にいた。4年たち農業経済・エンジニア学部が独立したとき(教員39人)、学長からこの学部長になれといわれた。私は29歳だった。学部長は教育大臣の任命になるが、私は「一番若い学部長」と言われた。当時、農大には5つの学部があった。獣医・動物技術・農業・農業経済エンジニア・一般教育の5学部だった。また農業経済エンジニア学部には、エンジニア・農業経済・放牧の3つの研究室があった。私にとってはとても大きな仕事で、経験ある教師と協力して仕事をした。有名な人た

ちとも一緒になった。学部長の仕事は、教育・研究・学生指導の3分野に関わっていた。

学部長を2年やり、75年に科学アカデミーで大学院の試験があり、それを受験した。400人参加し、40人が合格した。試験科目は、革命党の歴史、ロシア語、専門学科の3領域で、方法は面接・論文などだった。私は合格し、ロシアのアルマータ農業大学の大学院に3年間留学した。そこはタシケントのそばで、冬がなく、果物特にりんごの栽培が盛んだった。私の研究テーマは「らくだ産業の製品向上」というものだった。当時モンゴルには駱駝が61万頭いた。今は5-6万頭に減ってしまった。79年に博士号をとった。これは“Science of Doctor”の一つ前のドクターで、Ph.dに相当する。

79年12月に帰国した。当時は農牧分野のドクターは少なかった。私は有名になった。だから革命党のことをよく言わないとだめで、特に講演の時には革命党を賛美しないとけなかった。しかし私は拒否した。私は“ただの教師”になった。しかし80年に再び農業経済学部長になれといわれ、85年まで学部長をした。81-87年は、ウランバートル市の住民委員会(市議会)の委員にもなった。ここでウランバートルの農業・貿易政策作りの仕事も担当した。

84年に講師(Dozent)の資格を取った。これは教員の資格でプロフェッサーの前の資格だ。教授になるにはDoctor of Scienceを取得しないとだめで、私はまだこの資格をとっていなかった。85年には大学の教務担当副学長になった。これを2年間やり、87年にはドンドゴビにある農牧業省付属の牧業研究所の副所長に指名された。ここで経済政策を担当した。同時に農牧業省の経済政策課長もした。この間多くの論文を書いたし、多くの人を教えた。ここで3年間勤めた。

89年ころから政治変動が始まった。農牧業大学では学部長を選挙で選ぶようになった。5人が争い、私を選ばれた。これで学部長3回目となった。89-93年まで学部長をした。93年に農牧業大学は“農牧業総合大学”に再編された。経済学分野は私を中心に改革した。科学アカデミーと大学が協力し大学キャンパス内に経済研修研究所をつくった。ここの所長を97年までやった。97年には親友のドルジンスレンと科学者のアブダ(現在国会議員)と私とで、国際経済ビジネス大学(私立大学)をつくり、02年まで私が学長をした。

99年に私はDoctor of Scienceをモンゴル国立大学で取得した。テーマは「遊牧民家庭で作る製品に影響を与える諸要素の改善」だった。2000年には農牧業大学の教授になった。この審査は厳しかった。58人中12人が教授になった。教授は大学教員の秘密投票で選出するもので、最後は教育大臣の任命による。いま教授は300人くらい農牧大にいるが、質は落ちてきている。

02年から私は私立大学協会の事務局長になり、私立大学の改革を援助してきた。2000年にはバヤンホンゴルにホンゴル大学を作り学長となった。現在は私大協会の事務局長をやめ、ホンゴル大付属の機関として“農業職業訓練センター”の設置を申請している。これを国立の施設として位置づけ、授業料を取らないでもいいように計画している。通常コースは2・5年(高卒の資格も取得)として、短期コース(1ヶ月及び1年コース)も予定している。1990年以降モンゴルの職業教育は壊滅した。高校からの職業教育を充実させないとモンゴルはだめになる。

私にとって1990年の変革はよかった。力のある人が自由に自分の力を発揮できるようになった。これはいいことだ。しかし他方で自由になりすぎ、自分の責任をとらなくなってしまった。これは悪い面だ。責任の自覚のない自由ではだめだ。

(小出コメント)

アデイヤさんは農業経済の専門研究者としてこの国の高等教育や農業政策をリードしてきた。農業経済といっても、農業技術の開発をベースにして農業を中心とする地域開発や政策形成とかかわってきた。だから農業経済学者というより農学者といったほうがいい。

いうまでもなくこの国の農業は、遊牧 (Nomad) が中心で、農業 (Agriculture) はむしろ敬遠されてきた。農業が定着してきたのは社会主義時代の60年以降だと思う。特に小麦の大規模生産が遊牧地を席卷し、この面では輸出国にさえなった。遊牧地は掘り返され、草原の土はひっくり返された。そこは今では見る影もなく砂漠化している。90年以降大規模生産を維持できる条件はまったくなくなったからである。

アデイヤさんの考える農業はこうした農業ではない。開発された農業技術と遊牧民の生活改善を結びつけ、あるいは都市近郊の河川敷を中心とする農業開発を推し進め、モンゴル経済・産業の自給体制を強化し、特に地方の生活の再生産過程を補強しようとするものである。学生時代の彼の所属学科が「エンジニア農業経済」であり、農牧業大学に移ってからの所属学部が「農業経済エンジニア」学部だったことから彼の関心が社会主義的農業経済ではなく、農業の技術改革と農業政策・地域開発との結合にあったことがわかる。だからこそ「1990年問題」はかれの研究面にはほとんど影響を与えていない。

彼のキャリアで際立っているのは29歳という若さで学部長になったことだ。その後彼は、学部長を3回にわたり勤めている。1990年の改革期には学部教員による投票という新しい方式で彼は学部長に3たび選出された。改革期を乗り切るリーダーとして彼は同僚の信頼が厚かった。その後教務担当の副学長として大学全体の管理にも関わった。また当時としては多くなかった Doctor of Science を取得し、これまた新方式であるが、選挙による教授昇進によって正規の教授になった。こうしてみると、「1990年」はアデイヤさんにとっては旧来の教育や研究と対立するものではなく、むしろその発展の場を提供し、自らも90年改革を推進するリーダーの一人として衆目から見られていたといつてよい。彼は1990年改革を評価し、「私にとって1990年の変革はよかった。力のある人が自由に自分の力を発揮できるようになった。これはいいことだ。」といっている。ヒアリングでも言っているように、彼は必ずしも革命党の言いなりにはなっていないのである。

アデイヤさんは、私が初めて会ったときモンゴル私立大学協会の事務局長をしていた。おなじ教育省の建物にそのオフィスはあった。私は彼に私立大学協会の任務や活動について話を聞いたことがあるが、ついでに地方大学で優秀な大学を紹介してほしいと頼んだ。彼は二つの大学を紹介してくれた。ひとつはカラコルム大学で、もうひとつがホンゴル大学だった。彼はホンゴル大の創設者だった。設立の趣旨を聞き、私はアデイヤさんの構想にまったく賛同できた。モンゴルの将来の発展、特に地域開発は地方の大学の質にかかっている、というのである。

彼はホンゴル大学だけでなく、この大学を中心に地方の将来を背負って立つ若者の教育ネットワークを作り、地域開発に率先して協力している。具体的にいうと、私立の高校を作りホンゴル大学と接続させ、通信教育や夜間コースを作り地域の公務員や産業人の生涯学習に貢献し、いまでは農業教育訓練センターの設置を計画し、中卒者を対象にした農業教育を始めようとしている。またウランバートルの国立農牧業大学やエルテムオユ大学と連携し、卒業生を大学院に送ったり、この2大学の教員をホンゴルに招いて共同研究をしている。こうした構想は営利目的で私立大学の経営を考えている人からは絶対に出てこない。アデイヤさんだから出

てきた構想と思う。

その後私はこの大学を訪問し、オランチメグ副学長とも知り合い、彼女を今回北大に招待してセミナーを開いた。テーマは「大学と地域連携」で、こんご北海道とホンゴル大学との提携を深めようと考えている。

## 11 N・ジャダンバ (Nyamyn, JADAMBA モンゴル教育大学大学院担当教授)

略歴 ザブハン県出身。1944年生まれ。モ国立大(数学)卒業。プラハ大学院 Ph.D.(数学)取得。1979年モ国立大ホブト分校教員・校長。91年国立教育大学副学長。92-95年教育省副大臣。95年教育大学大学院担当教授。02年大統領より「功勞教員賞」受賞。現在教育大・大学院担当教授。

私は1944年ザブハンに生まれた。モンゴル国立大の数学科を卒業し、ついでチェコのプラハ大学で数学の研究を続け、ドクターをとった。

1979年モンゴルでははじめてモンゴル国立大学の地方大学ができた。国立ホブト大学で教員養成校だった。私はそこの校長になった。

91年に教育大学にもどり第1副学長になり、92-95年教育副大臣をした。95年からは教育大学の大学院制度担当になり、教員再教育政策の立案に当たった。ホブト大学時代から教員養成制度の発展に寄与してきたので、2002年に「功勞教員」賞を大統領より受けた。

現在の教育改革は90年代より本格的に始まった。それまでの教育環境ではとてもできない変化となった。92年当時は何らかの改革をしなければならず、副大臣となって教育改革マスタープラン作りにかかわった。また90年代は初等中等教育の教授プロジェクトをダニダの支援を受けて実施した。このダニダ・プロジェクトは今の教育改革の中で大きな役割を果たしたと思う。

今まであなた(小出:注)がやってきたヒアリングの対象者はみな私と協力してきた人たちだ。私が彼らを指導したり、私が指導されたりした。エルデネスレン(教育省副大臣、現国会議員)、トムルオチル(元国会議員、現教育省副大臣)、バーサンジャブ(教育省高等教育局長)などは国立大学での私の弟子だ。ドヨド教授は私の先生だ。私が尊敬する一番の人だ。ブルマーさんは私と一緒に国立大で物理・数学学部に勤めた同僚だ。また私がチェコに行っていたとき、彼女はドイツのフンボルト大学にいた。

私がホブト大学の校長をしていたとき、教育省はモンゴル国立大を卒業した若手の優秀な教師をホブトに派遣してくれた。これらの若い教師はよく仕事をした。彼らはそこで新しい力をつけた。そのうち何人かをあげると、ニャムダワーは2000年までホブト校の教師で、それから国会議員になり、05年からホブト県知事をしている。ガルバートルは、ホブト校で教員をし、4年間日本に留学しドクターをとり、いまは教育大の教員だ。モンゴル語・文学の研究者だ。ミャムガル(女性)は、いま教育大の心理学の研究室長だ。いまホブト校の校長をしているバーサンドルジは第1期生だった。

ホブト校で私は何か新しいことをしたわけではない。国の方針に従った。副大臣になってからは新しいことをしなげなければならない。特に法律作りは大変だった。92-93年はマスタープランづくりに追われ、ADBの支援で調査報告書を何冊も出した。日本の小西という人がADBから派遣され、協力してくれた。彼は今フィリピンのADB本部にいる。92-99年のダニダ・プロジェクトを含めて改革の方向の第1歩が打ち出された。特にマスタープラン作り(92-95年)の中心になったのはエンヘトブシンで、彼は今教育省の科学技術局長だ。このとき作っ

た報告書やマスタープランは今でも手に入る。それを見てほしい。

私のいまの仕事は3つで、教育大の修士課程と学士課程の改革、および現職教員の研修だ。このうち教員再教育わけても管理職研修が一番大きい。ザブハン、バヤンホンゴル、ドンドゴビでこの間20校を対象にして、学校支援プロジェクトを実施してきた。これはユネスコと東京工業大学の援助でやってきた。2週間前にも東工大の山口さん（女性）が来て私と一緒にニーズ調査をした。中でも重要なのは遠隔地教育で、教員のニーズから言えばビデオ教材の開発がいい。教育大には遠隔地教育センターがあり、ここにビデオの編集ラボがある。科技大のラボほど大きくはないが、ビデオ教材の編集はできる。

研修ニーズでは、校内研修の恒常化を求める声が大きだし、教員研修の機会についてICTを使った情報提供ネットワークが必要になっている。教員の研修は自己開発・自己研修が基本で、出来ない子どもがいること自体、教員の自己開発が必要なことを語っている。

私の専門は数学であるが、歴史や文学、モンゴル文字にも関心がある。92年から95年にかけてモンゴル文字の復活を教育省は図ったが、このとき東京の板橋区が援助してくれた。板橋区とモンゴル教育省との交流は私が始めた。

#### (小出コメント)

私はこのヒアリングを始めてから1990年代前半の教育改革について証言がほしかった。関係者の話からは今回実現できたジャダンバ教授を推す声が強かった。すでに聴取を終えたトムルオチル、それと今回のジャダンバのヒアリングで触れられているエンヘトブシン（教育省科学技術局長）などの話を総合すると、90年代前半の教育改革の実像が見えてくるだろう。

ジャダンバ教授は多忙の中を貴重な時間を割いてくれたのでそのライフヒストリーを聞くことは出来なかった。90年代前半に関係するところだけを聞いた。まずモンゴル国立大学のホプト校であるが、これは国立大が地方に設置した大学としてははじめてのものだった。現在でもあり、モンゴル西部の中等学校教員の養成校として評価が高く、私が西部地区の学校を訪問した際にはウランバートルの教員養成校よりその評価は高いくらいだった。ジャダンバはその初代校長として大学の礎を築いた重要人物だ。

私がモンゴルに来て90年以降の教育政策文書で最初に目を通したのが94年2月に作成された教育改革マスタープランであった。30人近い作成関係者の半数は教育省関係者で、エンヘトブシンがプロジェクト・ディレクターだった。外国からは、ニューヨーク州立大(D. M. WindhamとF. N. Kemmerer)、オレゴン州立大(L. J. Kenneke)、ピッツバーグ大(S. Spaulding)などが関わっている。ジャダンバは教育省の副大臣としてこの作成を指導した。またこのマスタープランを作成するに当たって、事前に教育セクターの各分野にわたる調査報告書が出ており、これにもジャダンバはかかわっていることがヒアリングからわかる。マスタープランとそれ以外の調査報告書などの政策文書を精読した上で再度ジャダンバ教授のヒアリングを企画したい。ダニグ・プロジェクトについてはその関係資料を入手していないので後日改めて情報を得た上でヒアリングをしたい。

いずれにしても90年代前半の基本的な教育政策文書の作成に直接当たった人脈が見えてきたことはありがたい。またこれらの政策文書についての評価を、ジャダンバを含む当時の教育省関係者から聞くことが可能になったことはこのジャダンバに負うところが大きい。

最後に彼が触れた板橋区との交流についてはジャダンバがその糸口をつけたことを私はまっ

たく知らなかった。これは意外な成果であり、来年に計画されている板橋区との交流10周年記念行事の中にぜひジャダンバ教授と関係者を組み入れることにしたい。

### III 現場教師の証言

#### 12 チュルンバル（スフバートル県第2学校教頭）

略歴 スフバートル県出身。1943年生まれ。60年4年制師範大学入学（モンゴル語・文学）。64年スフバートル県第1学校中学教員。1998年修士号取得。スフバートル県第2学校元校長。“功勞教員賞”受賞。

私は1943年にスフバートル県の中央に位置するハルザン・ソムの牧民の子として生まれた。馬20、羊200、らくだ10、ヤギと牛が10頭くらいの平均的遊牧民だった。兄弟は2人で、兄はロシアの大学を出て鉄道に勤めていた。私は1950年7歳で小学校に入り、60年に10年生学校を卒業した。兄は8歳で私と同じときに入学した。秋と春は10キロの道を馬で通った。冬はアイマグセンターまで家族で引越した。中学は2年間寮に入り、高校は知人宅に身を寄せた。

小学校は1クラス20人だった。7学年を卒業すると、高校へ行くか、職業学校へ行くか子どもが好きなように決めた。職業につきたい子は職業学校へ行った。成績で決めたわけではない。私は中学まであまり優秀でなかった。5段階で4レベルだった。通学中馬上で詩をよく読んだ。高校でも全教科4だった。私はモンゴル語や文学が好きだったので、4年制師範大に入った。1953年までは緊急に教員を養成しないとイケないので、2年制だったと思う。当時、希望者はほとんど大学に入れた。私は大学では「赤いDiploma」をもらった。

タテ文字には興味をもったが、大学1年生の半学期だけ習った。50年以降は学校ではタテ文字は教えていなかった。67年以降になり第5学年から習うようになった。文学は、世界文学で、ロシア・イギリス・アメリカ・ギリシャなどの古典を多く読んだ。プーシキンやシェイクスピアなどモンゴル語で読んだ。モンゴル語では語彙論、文法を中心に言語学、口伝文学も履修した。ロシア語は深くはしなかった。学生の中には成人労働者もいて、外国語は弱かった。

1964年に卒業し、5-10学年の中等学校の国語・文学の教員資格を取り、アイマグセンターに戻り、第1学校の教師になった。1998年に修士の資格をとり、コンサルタント教員になった。64年以降90年までの26年間、また90年以降現在まで14年間私は教師だった。この間教頭や校長、指導法研究室のリーダーなど歴任した。

60年までの共通教育は「初等教育」といい、4年生までだった。61年以降共通教育を「基礎教育」といって、65年までは第7学年まで、その後は第8学年までが基礎教育であった。80年以降になり、職業教育が10年制学校の中にも入ってくるようになり、第11学年で職業教育を習うことが特定のアイマグで試行された。60年代までの職業教育は夏休みに行われ、子どもキャンプ場で乳絞りや農牧業の実習をした。学校での教科書は今まで使っていた教科書の中から親と学校を選んだ。学校寮は、ネグデル（共同農場）が始まりそれが完成した50年代後半に広まった。寮は無料で、60年までは親が燃料、肉を出していた。90年までは今のよう統一試験はなかった。小学校はソムで、中学はアイマグで、高校は国が統一テストをした。90年以降は小・中・高すべて国が統一してやるようになった。

90年以降の学校はいったい何のための学校なのか。市場経済のニーズに合わせた学校とは到底いえない。市場経済の中で社会主義の学校がそのまま残り、そのままやっているように思え

る。学校はカリキュラムを作る権限を持たない。教科別の授業時間数や単元別の授業時間数を学校が決めることもできない。ナショナルスタンダードを100%実施するだけだ。それは市場経済のニーズにあった学校などではない。

教育環境は悪化した。指導法の改革やIT教育は少しずつ進んでいるが、教育システムは変わっていない。アカデミックな教育をプラクティカルな教育にするというのは正しいが、教育レベルを落としてはいけない。

90年以降で苦勞していることはいくつかある。第1は、子どもが教育に熱心でなくなった。本を読まなくなった。第2は、教員の社会保障の悪化で、教員は授業をしながら、商売もする。これでは子どもは教師を尊敬しない。第3は、ジェンダー問題で、大学生や教員は女性が圧倒的に多い。男性の大学生や教員が少なすぎる。第4は、教員の再訓練がないことだ。

私は「功勞教員」のメダルを大統領よりもらった。これは教育界最高の栄誉で、現役では県内に二人くらい、全国では200人くらいしかいない。受賞理由はわからないが、モンゴル文字の新しい指導法を開発した、行政職員を40年近くしてきた、多くの子どもを育て、学校改革にも影響を与え、10年制学校を多く作り、競争を導入した。こんなことが受賞に関係していると思う。40年間の勤務は長かったし、私の学校(第1学校)には優秀な教員が集まってきた。そうしたおかげで受賞したのだと思う。

#### (小出コメント)

チュルンバル氏とのヒアリングのきっかけを作ってくれたのは、スフバートル県の指導主事をやり、現在第1学校の校長をしているバイガルマーだった。彼女は2003年3月にJICAの国別特設研修(「教育行政」をテーマにした10数人のモンゴル関係者の日本派遣事業)で日本を1ヶ月間訪問している。きわめて優秀な女性教師で、この派遣研修後の帰国研修では質の高い教員研修会を何回も開いてきた。私もウランバートルやスフバートルで何回か彼女にあっていて、05年3月7日に彼女が私の事務所にやってきたとき、私の頭の中にはモンゴル教育行政関係の要人に対するヒアリングの企画があったので、彼女にスフバートルにいる人の中から聞き取り候補者をあげてもらった。その結果出てきたのがこのチュルンバル氏だった。彼女のもっとも尊敬する教師がチュルンバル氏だった。

ヒアリングからはチュルンバル氏がバイガルマーがもっとも尊敬する教員だという理由は必ずしも明確にはならなかった。しかし、1960年代に大学を卒業し、それから40年間ずっと学校現場で教員をやり続けた人の「思い」を知ることができた。特に1990年という年とその後の10数年が現場教師にとってどのような意味があったのかを垣間見ることができた。社会主義時代の学校が90年以降も改革されないでそのまま残ってしまい、市場経済社会に適應していないのではないかという彼の指摘は、有力な仮説になる視点だ。

1990年以降チュルンバル氏は新しい社会と学校になにかを期待したはずだ。しかし学校は期待に反してよくなったわけではない。前のままで、変化に対応していない。彼は古くからのモンゴル文字の指導法を開発してきた。それによりモンゴル文化の伝統を伝えたかったと思う。しかしそれが何かを聞き出すことはできなかった。90年の前後を通してずっと教員をやってきた人はそれほど多くはない。90年以降多くの教師が教員を辞め、日常の糧を別の世界に求めた。そうした中でチュルンバル氏は稀有な存在だ。だから教育界トップの賞を受賞した、と思う。そうした人からもっとモンゴルの教育の歴史を聞き出す技術が必要だ。そのためにさらに多

くの無名の人の話を聞かないといけない。またバイガルマーのチュルンバル氏に対する評価も聞く必要がある。